

『歸依仏法僧宝』考

石井修道

一 はじめに

『歸依仏法僧宝』を取り上げるにあたり、筆者には道元の説示で強い印象の残る二つの話がある。まず、そのことから触れておくことにしよう。

一つは『永平広録』巻三 一九七上堂であり、道元の四七歳の時にあたる。

上堂。挙す。世尊の在世に二比丘有り。仏所に詣らんと欲す。二人俱に渴し、路に虫水を見る。一人は虫水を飲まずして渴死し、天に生じて仏に見えて得道す。一人は水を飲み、後に仏所に至る。仏は其の故を問い已りて、憂多羅僧を脱いで黄金身を示して云く、「汝は是れ痴人なり。是の四大身を観るを用つて我と為つ。幻に成ぜる臭処なり。其れ法を見る者は、即ち我が身を見るなり」。師云く、天比丘は仏の法身を見、人比丘は仏の四大身を見る。未嘗、仏比丘は箇の甚麼を見る。良久して云く、其の師を觀んと欲わば、先ず弟子を觀よ。畢竟して如何。師、合掌して唱えて云く、南無仏陀耶、南無仏陀耶。(春秋社本三 一三四頁)。

この出典は『摩訶僧祇律』巻一八(大正二一 三七二c~三七二b)である。この上堂は誰もが感ずる問題であると思われるが、印象深いのは、何よりも筆者に「渴死」が選択できるかどうか(1)が突きつけられているという問題である。と同時に道元の「南無仏陀耶」の悲痛な声が耳に残ったからに他ならない。

二つ目は十二巻本『正法眼蔵』の検討を始めた最初の論文の「『深信因果』、『三時業』考」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五八号、二〇〇〇年)において、道元が「提婆達多」を重要課題であったとする故石川力山氏の発言を受けながら、秋田で十二巻本『正法眼蔵』を読み進めたことである。既に検討したものであるが、第八「三時業」の次の文への出会いである。

第二順次生受業者、謂若業此生造作增長、於第二生受異熟果、是名順次生受業。

第二に順次生受業とは、謂く、若し業を此の生に造作し增長せば、第二生に異熟果を受くるを、是れを順次生受業と名づく。

いはく、もし人ありて、この生に五無間業をつくれる、必ず順次生に地獄におつるなり。順次生とは、この生のつぎの生なり。余のつみは、順次生に地獄におつるもあり、また順後次受のひくべきあれば、順次生には大地獄におちず、順後業となることもあり。この五無間業は、さだめて順次生受業に地獄におつるなり。順次生、また第二生とも、これをいふなり。

五無間業、一者殺父、二者殺母、三者殺阿羅漢、四者出仏身血、五者破和合僧。

この五無間業のなかに、いづれにても一無間業をつくれるもの、必ず順次生に地獄に墮するなり。

あるいはつぶさに五無間業ともにつくるものあり、いはゆる迦葉波仏のときの華上比丘これなり。あるいは一無間業をつくるもの、いはゆる釈迦牟尼仏のときの阿闍世王なり、そのちちをころす。あるいは三無間業をつくれるものあり、釈迦牟尼仏のときの阿逸多これなり、ちちをころし、母をころし、阿羅漢をころす。この阿逸多は、在家のときつくる、のちに出家をゆるさる。

提婆達多、比丘として三無間業をつくれり。いはゆる破僧・出血・殺阿羅漢なり。あるいは提婆達兜といふ、此翻天熱

此に天熱と翻す。その破僧といふは、

將五百新學愚蒙比丘伽耶山、作五邪法、而破法輪僧。身子厭之眠熟、目連擊衆將還、提婆達多眠起發誓、誓報此怨、捧

縱三十肘、広十五肘石、擲仏。山神以手遮石、小石迸傷仏足、血出。

五百の新學愚蒙の比丘を吉伽耶山に將いて五邪法を作して法輪僧を破す。身子、之を厭いて眠熟せしめ、目連、衆を擲けて將に還らしめんとせり。提婆達多、眠りより起きて誓いを發し、此の怨に報いんと誓い、縱三十肘、広十五肘の石を捧げて仏に擲つ。山神、手を以て石を遮り、小石迸りて仏の足を傷つけ、血出でぬ。

もしこの説によらば、破僧さき、出血のちなり。もし余説によらば、破僧・出血の先後、いまだ明めず。また拳をもて蓮華色比丘尼をうちころす。この比丘尼は阿羅漢なり。これを三無間業をつくれりといふなり。

破僧罪につきては、破羯磨僧あり、破法輪僧あり。破羯磨僧は、三洲にあるべし、北洲をのぞく。如来在世より、法滅のときにいたるまでこれあり。破法輪僧はただ如来在世のみにあり。余時にはただ南洲にあり、三洲になし。この罪、最大なり。この三無間業をつくれるによりて、提婆達多、順次生に阿鼻地獄に墮す。かくのごとく五逆つぶさにつくれるものあり、一逆をつくれるものあり、提婆達多がごときは三逆をつくれり。ともに阿鼻地獄に墮すべし。その一逆をつくれるがごとき、阿鼻地獄一劫の寿報なるべし。具造五逆のひと、一劫のなかにつぶさに五報をうくとやせん、また前後にうくとやせん。

先徳曰、「阿含・涅槃、同在一劫、火有厚薄。先徳曰く、阿含・涅槃に同じく一劫在り、火に厚薄有り、と」。あるいはは、「唯在増苦増。唯だ増苦増在り、と」。

いま提婆達多、かさねて三逆をつくれり、一逆につくれる罪人の苦には三倍すべし。しかあれども、すでに臨命終のときは「南無」の言をとなへて悪心すこしきまぬかる。うらむらくは、具足して「南無仏」と称せざること。阿鼻にしてははるかに釈迦牟尼仏に帰命したてまつる、続善ちかきにあり。なほ阿鼻地獄に四仏の提婆達多あり。(拙稿論文六四、八頁。岩波文庫本四 三二〇～二五頁参照)

このように十二巻本『正法眼蔵』を検討を重ねて、今回は第五『供養諸仏』を学び、今回この第六『帰依仏法僧宝』に読み移る時にそこに一つの流れが見出されるであろう。仏教者として、出家・受戒し、仏を供養していく、それは仏教者の基本的な修行生活なのである。更に「仏」への帰依から、「法」、そして「僧」への帰依となる。このことにより仏教者の求むべき「作仏」が成就していくのである。「供養諸仏」に既につきのようにつづられていた。

過去の諸仏を供養したてまつり、出家し、随順したてまつるがごとき、かならず諸仏となるなり。供仏の功德によりて作仏するなり。いまだかつて一仏をも供養したてまつらざる衆生、なによりてか作仏することあらん。無因作仏あるべからず。(『供養諸仏』考、駒澤大学仏教学部研究紀要 第六〇号、二〇〇二年)五六頁、岩波文庫本四 一九七頁参照)

「仏」への帰依は、その説かれた「法」をも包み込むことは当然のことであろう。『供養諸仏』には次の説示も存在したのである。

いはゆる「諸法実相を大師とする」といふは、仏法僧三宝を供養恭敬したてまつるなり。諸仏は無量阿僧祇劫そこばくの

功德善根を積集して、さらにその報をもとめず。ただ功德を恭敬して供養しますすなり。仏果菩提のくらゐにいたりてなほ小功德を愛し、盲比丘のために袈針じしんします。仏果の功德をあきらめんとおもはば、いまの因縁、まさしく消息なり。

しかあればすなはち、仏果菩提の功德、諸法実相の道理、いまのよにある凡夫のおもふがごとくにはあらざるなり。いまの凡夫のおもふところは、造悪の諸法実相ならんとおもふ、有所得のみ仏果菩提ならんとおもふ。かくのごとくの邪見は、たとひ八万劫をしないといふとも、いまだ本劫、本見、末劫、末見をのがれず。いかでか唯仏と仏の究尽しますところの諸法実相を究尽することあらん。ゆゑいかんとなれば、唯仏と仏の究尽しますところ、これ諸法実相なるがゆゑなり。（拙論八〇頁、同 一一一—一二三頁参照）

第六の『帰依仏法僧宝』と十二巻本『正法眼蔵』との関係は、もちろんひとり第五の『供養諸仏』に限るものではない。第一『受戒』において既に次の説示となつて、示されていたのであり、三帰依はまた三帰依戒を含む十六條戒の菩薩戒にも含まれるのであるから、最初から帰依三宝が説かれていることは当然のことと言つてよい。その様子を『受戒』では次のように示すのである。

その（『菩薩戒を受くる』儀は、かならず祖師を焼香礼拝し、「心受菩薩戒」を求請するなり。すでに聽許せられて、沐浴清浄にして、「新淨の衣服」を著し、あるいは衣服を「浣洗」して、花を散じ、香をたき、礼拝恭敬してその身に著す。あまなく形像を礼拝し、三宝を礼拝し、尊宿を礼拝し、諸障を除去し、身心清浄なることをうべし。その儀ひさしく仏祖の堂奥に正伝せり。

そののち、道場にして和尚・阿闍梨、まさに受者をしへて礼拝し、長跪せしめて合掌し、この語をなさしむ、

帰依仏、帰依法、帰依僧。帰依仏陀両足中尊、帰依達磨離欲中尊、帰依僧伽衆中尊。帰依仏竟、帰依法竟、帰依僧竟。

如来至真無上正等覺是我大師、我今帰依。從今已後、更不帰依邪魔外道。慈愍故。三説。第三疊慈愍故三遍。

善男子、既捨邪帰正、戒已周円。（同 一〇九—一一頁）

これらの三帰戒は『禅苑清規』巻九（鏡島元隆等訳本 三〇八頁）に基づくが、これはまた『帰依仏法僧宝』中に取り上げられることはもちろんである。更に『帰依仏法僧宝』の冒頭はいきなり『禅苑清規』から始まっているのである。そして邪魔外道

への帰依の否定は、『帰依仏法僧宝』においても具体的に示されていくのである。

更に十二巻本『正法眼蔵』の中で大きな特色をもつ第四『發菩提心』には、菩提心を『大般涅槃經』「迦葉菩薩品」の語である「自未得度先度他の心」として具体化し、それをおこすことを説く中に、菩提心の中から三宝を不断にするという説が示されるが、この説は第十一『一百八法明門』(同 三九五頁)の一つであることは言うまでもない。

しかあればすなはち、たとひ在家にもあれ、たとひ出家にもあれ、あるいは天上にもあれ、あるいは人間にもあれ、苦にありといふとも、楽にありといふとも、はやく自未得度先度他のおこすべし。衆生界は有辺無辺にあらざれども、先度一切衆生の心をおこすなり。これすなはち菩提心なり。

一生補処菩薩、まさに閻浮提にくだらんとするとき、觀史多天の諸天のために、最後の教をほごすにいはく、「菩提心是法明門、不断三宝故」。

あきらかにしりぬ、三宝の不断は、菩提心のちからなりといふことを。菩提心をおこしてのち、かたく守護し、退転なかるべし。(同 一八八―一八九頁)(中略)

菩薩の初心のとき、菩提心を退転すること、おほくは正師にあはざるによる。正師にあはざれば正法をきかず、正法をきかざればおそらくは因果を撥無し、解脱を撥無し、三宝を撥無し、三世等の諸法を撥無し。いたづらに現在の五欲に貪著して、前途菩提の功徳を失す。(同 一九一頁)

この『發菩提心』の最後の文は、十二巻本『正法眼蔵』の重要な説示の第八『三時業』(同 三三三頁)や第十『四禪比丘』(同 三五五頁)と関連するものであり、先にいう第十一『一百八法明門』の「菩提心是法明門、不断三宝故」まで密接に関連するのである。

このように見て行くならば、第六『帰依仏法僧宝』は十二巻本『正法眼蔵』の中心に位置して、諸巻が関連しあい、しかもその関連が十二巻本『正法眼蔵』の根幹とも結びつけることのできる内容を含んでいることを指摘することができよう。

それを諸巻と第六『帰依仏法僧』の中心テーマとの関連で考えて、一語でまとめてみるならば、冒頭の第一段の次の語に集約できると言ってもよいかも知れない。

帰依三宝の功徳、つひに不朽なり。(同 二五六頁)

二 試訳『帰依仏法僧宝』

第六『帰依仏法僧宝』の構成を次のように十段に分ける。（下段の数字は岩波文庫本（四）の頁数）

- (一) 三宝を敬うや、『禅苑清規』巻八、一百二十問第一 二五五頁
- (二) 帰依三宝とは 二五六頁
 - (1) 「帰依」 二五七頁
 - (2) 「仏」 二五八頁
 - (3) 「法」 二五八頁
 - (4) 「僧」 二五八頁
- (5) 四種三宝（住持三宝・化儀三宝・理体三宝・一体三宝） 二五八頁
- (三) 『法華経』如来寿量品の三宝の功德 二六〇頁
- (四) 外道への帰依の否定 二六一頁
 - (1) 『俱舍論』巻一四 二六一頁
 - (2) 『涅槃経』巻一六と『大智度論』一一一 二六三頁
 - (五) 湛然『法華玄義釈籤』の三帰の功德 二六四頁
 - (1) 『希有経』 二六四頁
 - (2) 『増一阿含経』 二六五頁
 - (六) 『大集経』の三帰済龍品 二六七頁
 - (七) 『涅槃経』の釈摩男が優婆塞になる話 二七四頁
 - (八) 驢胎より天帝釈に還る話（法句経）『止観輔行伝弘決』四之二 二七六頁
 - (九) 天帝拝畜為師の因縁（未曾有経）同 四之四 二七八頁
 - (十) 仏祖の法は、はじめに帰依三宝あり（まとめ） 二八二頁

第六 帰依仏法僧宝⁵

(一) 禅苑清規⁶曰、敬仏法僧否。一百二十問⁷第一。

『禅苑清規』に曰く、「仏法僧を敬うや」。一百二十問の第一なり。

あきらかにしりぬ、西天東土、仏祖正伝するところは、恭敬仏法僧なり⁸。帰依せざれば恭敬せず、恭敬せざれば帰依すべからず。この帰依仏法僧の功德、かならず感応道交⁹するとき成就するなり。たとひ天上人間、地獄鬼畜なりといへども、感応道交すれば、かならず帰依したてまつるなり。すでに帰依したてまつるがときは、世生生生、在在処処に増長し、かならず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。おのづから悪友にひかれ、魔障にあふて、しばらく断善根¹⁰となり、一闍提¹¹となれども、つひには続善根¹²し、その功德増長するなり。帰依三宝の功德、つひに不朽なり。

「訳」 第六 帰依仏法僧宝

『禅苑清規』に言く、「仏法僧を敬うや」。一百二十問の第一なり

この語から明かに次のことが判明する。インド・中国の仏祖が正伝するところは、仏法僧を敬うということである。帰依しなければ敬うことはしないし、敬わなければ帰依することはない。この仏法僧に帰依するという善業を積み重ねて得られた力(功德)は、かならず衆生と諸仏が心を響き合わせた(感応道交)時に完成するのである。たとひ天上・人間・地獄・餓鬼・畜生であっても、諸仏と心を響き合わせたならば、かならず帰依するのである。帰依したからには、生を繰り返すことに、いたる処において(その結びつきは)増長し、かならず善業を積み重ねて得られた力を蓄えて、無上正等覺(阿耨多羅三藐三菩提)を完成するのである。自然と悪友にそそのかされて、悪魔の障礙に会い、しばらくは善根を断つこととなり、善種を焦がした身(一闍提)となつたとしても、結果として善根を継続し、その善業を積み重ねて得られた力を増長するのである。三宝に帰依する善業を積み重ねて得られた力は、究極的には朽ちることはないのである。

(二) その帰依三宝とは、まさに淨信をもちらにして、あるいは如来現在世にもあれ、あるいは如来滅後にもあれ、合掌し

低頭して、口になへていはく⁽¹⁴⁾

我某甲、今身より仏身にいたるまで、

歸依仏、歸依法、歸依僧。

歸依仏両足尊、歸依法離欲尊、歸依僧衆中尊。

歸依仏竟、歸依法竟、歸依僧竟⁽¹⁵⁾。

はるかに仏果菩提をこころざして、かくのごとく僧那⁽¹⁶⁾を始発するなり。しかあればすなはち、身心いまも刹那刹那に生滅⁽¹⁷⁾すといへども、法身かならず長養して、菩提を成就するなり。

「訳」その三宝に歸依するということは、正に清浄なる信心を專一に保って、如来がこの世におられても、あるいは如来が寂滅せられた後であつても、合掌し低頭して、口にお唱えするのである。

わたくし自身は、今のこの身から仏の身に至るまで、仏に歸依し、法に歸依し、僧に歸依いたします。(その三宝に歸依するのは)智慧と実践とが備わつた尊い「仏」であるから歸依し、欲望を離れた尊い「法」であるから歸依し、多くの修行者の尊い集まりの「僧」であるから歸依します。こうして仏に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟りました。

遠く仏の果位と菩提の完成を志して、このような無上の誓願を始めて発するのである。そうであるからこそ、身心は今も刹那刹那に生滅すると言つても、法身はかならず長く養育されて、菩提を完成するのである。

(一)(1) いはゆる「歸依」とは、歸は歸投なり、依は依伏なり。このゆゑに歸依といふ。歸投の相は、たとへば子の父に歸するがごとし。依伏は、たとへば民の王に依するがごとし。いはゆる救済の言なり⁽¹⁸⁾。仏はこれ大師なるがゆゑに歸依す、法は良薬なるがゆゑに歸依す、僧は勝友なるがゆゑに歸依す⁽²⁰⁾。

問、何故、偏歸此三。答、以此三種畢竟歸處、能令衆生出離生死、証大菩提故帰。

問、何が故にか偏に此の三に歸するや。答、此の三種は畢竟歸處にして、能く衆生をして生死を出離し、大菩提を証せしむるを以ての故に歸す⁽¹⁹⁾。

此三、畢竟不可思議功德⁽²²⁾なり。

「訳」 「二」で「帰依」と言つのは、帰は身を委ねる（帰投する）の意味であり、依は任せて随つ（依伏する）の意味である。このことから帰依と言つ。帰投の様子は、たとえて言えば子が父に身を委ねるようなものである。依伏とは、たとえて言えば民が王に任せて随つようなものである。そのことはそれをなすことによつて救済されると言つ意味である。仏は優れた指導者（大師）であるから帰依し、法はよく効く薬（良薬）であるから帰依し、僧は立派な友人（勝友）であるから帰依するのである。

『大乘義章』に「問つ、「なぜ専らこの三つに帰依するのか」。答つ、「この三種は究極的に帰依する処であつて、衆生を生死から出離させ、大菩提を証^さらせるから帰依するのである」。

「三」の宝は、畢竟、不可思議な善業を積み重ねて得られた力なのである。

(二)(二) 仏、西天には仏陀耶と称す、震旦には覺と翻す。無上正等覺なり。

「訳」 仏はインドでは仏陀耶^{ブツダヤ}と称す、中国では覺と翻譯する。無上正等覺のことである。⁽²³⁾

(二)(三) 法は西天には達磨と称す、また曇無と称す。梵音の不同なり。震旦には法と翻す。一切の善、惡、無記の法、ともに法と称すといへども、いま三宝のなかの帰依するところの法は、軌則⁽²⁴⁾の法なり。

「訳」 法はインドでは達磨^{ダツマ}と称し、また曇無^{トム}と称す。梵音が同じではない。中国では法と翻譯する。一切の善・惡・無記の法を、ともに法と稱するけれども、今、三宝の中で帰依する法とは、軌則^{たいていの}の法^ののことである。

(二)(四) 僧は西天には僧伽^{ソウカ}と称す、震旦には和合衆と翻す。⁽²⁵⁾

かへのことと称讚きたれり。

「訳」僧はインドでは僧伽サンガと称し、中国では和合衆と翻訳する。
このように称讃してきたのである。

(二)(5) 住持三宝⁽²⁶⁾

形像塔廟、仏宝。

黄紙朱軸所伝、法宝。

剃髮染衣、戒法儀相、僧宝。

化儀三宝⁽²⁷⁾

釈迦牟尼世尊、仏宝。

所転法輪、流布聖教、法宝。

阿若憍陳如等五人、僧宝。

理体三宝⁽²⁸⁾

五分身、名爲仏宝。

滅理無爲、名爲法宝。

学無学功德、名爲僧宝。

一体三宝⁽²⁹⁾

証理大覚、名爲仏宝。

清淨離染、名爲法宝。

至理和合、無擁無滞、名爲僧宝。

かくのごとくの三宝に帰依したてまつるなり。もし薄福少徳の衆生は、三宝の名字なほききたてまつらざるなり。いかにい
はんや帰依したてまつることえんや⁽³⁰⁾。

「訳」 寺院に見られる（住持）三宝

像に彫られたり塔廟にまつられる（形像 塔廟）仏像としての宝。書写され印刷された（黄紙朱軸、所伝）經典としての宝。剃髮し袈裟を着て、戒法を守り儀礼を行う僧団としての宝。

教化の対象の方法から生まれた（化儀）三宝

インドに生まれた釈迦牟尼世尊としての仏の宝。説法して流布した聖教としての法の宝。阿若憍陳如等五人の比丘が最初に僧団を形成した宝。

真理そのもの（理体）三宝

五分法身（戒・定・慧・解脱・解脱知見）としての仏の宝。苦を滅した真理が悟り（滅理無為）としての法の宝。教えを学ぶべきものを残している者と、もはや学ぶべきものをすっかりなくした者により積み重ねて得られた力としての僧団の宝。

真理を貫く一なる（一体）三宝

真理を証り大なる覺りとしての仏の宝。清浄にして煩惱を離れたものとしての法の宝。真理に到達して和合して、擁擁ぐことも無く滞ることもないものとしての僧団の宝。

このように三宝に帰依したてまつるのである。もし幸福な結果が及ぶのが薄く、善業を積み重ねて得られた力が少ない衆生は、三宝の名前は依然として聞きたてまつることはないのである。ましてや三宝に帰依したてまつることを得ることがあろうか。

(三) 法華經註曰、是諸罪衆生、以惡業因緣、過阿僧祇劫、不聞三宝名。

『法華經』に曰く、「是の諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以て、阿僧祇劫を過ぐとも、三宝の名を聞かず」。

法華經は、諸仏如来一大事の因縁なり。大師釈尊所説の諸經のなかには、法華經これ大王なり、大師なり。余經、余法は、みなこれ法華經の臣民なり、眷屬なり。法華經中の所説これまことなり、余經中の所説みな方便を帯せり、ほとけの本意にあらず。余經中の説をきたして法華に比較したてまつらん、これ逆なるべし。法華の功德力をかうぶらざれば余經あるべからず、余經はみな法華に帰投したてまつらんことをまつなり。この法華經のなかに、いまの説します。しるべし、三宝の功德、ま

さに最尊なり、最上なりといふこと。

「訳」『法華經』に言っている、「諸の罪をもつ衆生は、過去に爲した悪業の因縁でもって、阿僧祇劫を経過しても、三宝の名を聞くことはないのである。」。

『法華經』は、諸仏如来がこの世に出世された一大事の因縁の本懐を説き明かしたものである。大師釈尊の説かれた諸經の中では、『法華經』が大王であり、大師なのである。その他の經や法は、みな『法華經』の家臣であり、従属者である。『法華經』の中に説かれたことが、真実なのである。その他の經の中に説かれたことは、みな方便を含んでいるから、仏の本意ではない。その他の經の中の説を持ち出して、『法華經』に比較しようとするのは、本末転倒なのである。『法華』の善業を積み重ねて得られた力を受けなければ、その他の經は存在しないのである。その他の經はみな『法華』に帰投してまつることを待つのである。この『法華經』の中に、先に引用した説があるのである。三宝に帰依する善業を積み重ねて得られた力こそ、正しく最も尊いものであり、最上のものであることを知らねばならない。

(四)(1) 世尊言、衆人怖所逼、多帰依諸山、園苑及叢林、孤樹制多等、此帰依非勝、此帰依非尊、不因此帰依、能解脱衆苦。諸有帰依仏、及帰依法僧、於四聖諦中、恒以慧觀察、知苦知苦集、知永超衆苦、知八支聖道、趣安穩涅槃。此帰依最勝、此帰依最尊、必因此帰依、能解脱衆苦。

世尊言く、「衆人所逼を怖れて、多く諸山、園苑及び叢林、孤樹、制多等に帰依す。此の帰依は勝に非ず、此の帰依は尊に非ず。此の帰依に因りては、能く衆苦を解脱せず。諸の仏に帰依し、及び法僧に帰依すること有るは、四聖諦の中に於て、恒に慧を以て觀察し、苦を知り苦の集を知り、永く衆苦を超えんことを知り、八支の聖道を知り、安穩涅槃に趣く。此の帰依は最勝なり、此の帰依は最尊なり。必ず此の帰依に因りて、能く衆苦を解脱す。」。

世尊あきらかに一切衆生のためにしめします。衆生いたづらに「所逼をおそれて」、「山神、鬼神等に帰依し、あるいは外道の制多に帰依することなかれ。かれはその帰依によりて衆苦を解脱することなし。」

「訳」 世尊が言われた、「多くの人は見えない力が襲ってくる恐怖の為に、諸山の園林や樹林、大きな霊木や霊廟（制多）等に常に帰依しがちである。この帰依は勝れたものではないし、この帰依は尊いものでもない。この帰依では、多くの苦から解脱することはできない。あらゆるものが仏に帰依し、法と僧とに帰依し、四聖諦（苦諦・苦集諦・苦滅諦）の教えの中で、常に智慧で観察すれば、苦を知り、苦の原因を知り、永く多くの苦を脱れることを知り、八つの聖道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）を知るのである。その結果、安穩なる涅槃に到達するのである。この帰依が最も勝れ、この帰依が最も尊いのである。必ずこの帰依によるならば、多くの苦から解脱することができるのである。」

世尊は明かに一切衆生のために示しておられる。衆生はいたずらに見えない力が襲ってくることを恐れて、山の神や幽霊等に帰依し、あるいは外道の靈廟に帰依してはならない。その者はその誤った帰依によりて多くの苦を解脱することはない。

(四)(2) おほよそ外道の邪教にしたがうて、

牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘧戒、豐戒、狗戒、雞戒、雉戒、以灰塗身、長髪為相、以羊祠時、先呪後殺、四月事火、七日服風、百千億華供養諸天、諸所欲願、因此成就。如是等法、能為解脱因者、無有是処。智者所不讀、唐苦無善報。

牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘧戒、豐戒、狗戒、雞戒、雉戒あり。灰を以て身に塗り、長髪もて相を為し、羊を以て祠する時、先に呪りて後に殺す。四月火に事え、七日風に服し、百千億の華もて諸天に供養し、諸の欲う所の願、此れに因りて成就すという。是の如き等の法、能く解脱の因なりと為さば、是の処有ること無けん。智者の讀めざる所なり、唐しく苦しんで善報無し。

かくのごとくなるがゆゑに、いたづらに邪道に帰せざらんこと、あきらかに甄究すべし。たとひこれらの戒にことなる法なりとも、その道理、もし孤樹、制多等の道理に符合せらば、帰依することなかれ。人身うることかたし、仏法あふことまねり、いたづらに鬼神の眷屬として一生をわたり、むなしく邪見の流類として多生をすこさん、かなしむべし。はやく仏法僧三宝に帰依したてまつりて、衆苦を解脱するのみにあらず、菩提を成就すべし。

「訳」 そもそも、外道の邪な教えにしたがって、牛をまねる戒、鹿をまねる戒、羅刹をまねる戒、鬼をまねる戒、

唾くつをまねる戒、鬘まげをまねる戒、狗をまねる戒、鶏をまねる戒、雉きをまねる戒を守り、灰を体に塗り、長く髪を垂らし、羊を生け贖として捧げて祭る時、先に呪いのりを述べて後に殺し、四ヶ月の間に火を拝し、七ヶ月の間に風にひたすら服す。百千億の華をもって、諸天に供養し、諸の願いごとを、これによって成就しようとする。これらの方法を、解脱の善因とすることができることは、道理として成り立たない。智者が贊嘆しないものは、空しい苦の繰り返しであり、善い報いはないのである。

このようであるから、いたずらに邪道に帰依してはならないことを、明かにはつきりと究めなければならぬ。たといこれらの戒と異なる法であっても、その道理が、もし大きな靈木、靈廟等の道理に符合するのであれば、帰依してはならない。この世に人間と生まれることは難しいし、仏法に出会うこと稀である。いたずらに幽霊（鬼神）の従属者（眷属）として一生を過ごし、むなしく邪見の流類として多くの生を繰り返すことは、悲しむべきことである。早急に仏法僧の三宝に帰依したてまつりて、多くの苦を解脱するだけではなく、菩提を成就しなければならぬ。

(五)(1) 希有経云、教化四天下及六欲天、皆得四果、不如一人受三帰功德。

『希有経』に云く、「四天下及び六欲天を教化して、皆な四果を得しむとも、一人の三帰を受くる功德には如かじ」。

「四天下」とは、東西南北なり。そのなかに、北洲は三乗の化いたらざるところ。かしこの一切衆生を教化して阿羅漢となさん、まことにはなはだ希有なりとすべし。たとひその益ありとも、一人ををしへて三帰をうけしめん功德にはおよぶべからず。また六天は、得道の衆生まれなりとするところなり。かれをして四果をえしむとも、「一人の受三帰の功德」のおほくふかき(4)におよぶべからず。

「訳」『希有経』に言っている、「四天下（下の眼蔵の本文に釈あり）及び六欲天（四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化乐天・他化自在天）を教え導くならば、みな阿羅漢果（四果）を得ることになるが、それも一人が三宝に帰依して受ける善業を積み重ねて得られた力には及ばない」。

四天下とは、東・西・南・北の四洲（東勝身洲・西牛貨洲・北俱盧洲・南瞻浮洲）である。そのなかで、北洲は三乗の教えは通

じない場所であるから、そこにいる一切衆生を教え導いて、阿羅漢になそうとすることは、実に大いに稀なることである。たといその利益があるとしても、一人に教えて三宝に帰依させ、それによって受ける善業を積み重ねて得られた力には及ばない。また六欲天は、悟りを完成する衆生が稀にしかない場所である。その天人たちに阿羅漢果を得させたとしても、一人の者が三宝に帰依して受ける善業を積み重ねて得られた力の方が多くしかも深いには及ばない。

(五)(2) 増一阿含經云、有刹利天子、五衰相現、当生猪中。愁憂之声、聞於天帝。天帝聞之、喚來告曰、汝可歸依三宝。即時如教、便免生猪。仏説偈言、諸有歸依仏、不墜三惡道。尽漏処人天、便當至涅槃。受三歸已、生長者家、遷得出家、成於無學。

『増一阿含經』に云く、刹利天子有り、五衰の相現じて、当に猪の中に生ずべし。愁憂の聲、天帝に聞えき。天帝之れを聞きて、喚び來りて告げて曰く、「汝、三宝に歸依すべし」。即時に教の如くせしに、便ち猪に生ずることを免れたり。仏、偈を説いて言わく、「諸有、仏に歸依せば、三惡道に墜ちざらん。漏を尽くして人天に処し、便當と涅槃に至るべし」。三歸を受け已りて、長者の家に生じて、遷た出家することを得て、無學を成せり。

おほよそ歸依三宝の功德、はかりはかるべきにあらず、無量無辺なり。

「訳」『増一阿含經』に言っている、「刹利天子がいて、五衰の相が現われ、豚の中に生まれ変わることになるうとしていた。嘆き悲しむ声が、天帝に聞こえた。天帝はその声を聞いて、喚び來させて告げて言った、『あなたは三宝に歸依しなさい』。ただちに教えのようにすると、豚に生まれ変わることを免れた。仏は偈を説いて言った、『あらゆる者が仏に歸依すれば、三惡道に墜ちることはない、煩惱を尽くして人天に生まれ変わり、すぐに涅槃に到達するであらう』。三歸を受け已ると、長者の家に生まれ、さらに出家することができて、涅槃(無學)に到達した。

そもそも、三宝に歸依して善業を積み重ねて得られた力は、數量で計算できるものではなく、無量無辺なのである。

(六)(1) 世尊在世に、二十六億の餓饉、ともに仏所に詣し、みなことごとくあめのいこくなみだをふらして、まつしてま

うさく、

唯願哀愍、救済於我。大悲世尊、我等憶念過去世時、於仏法中雖得出家、備造如是種種惡業。以惡業故、經無量身在三惡道。亦以余報故、生在龍中受極大苦。仏告諸龍、汝等今当尽受三帰、一心修善。以此緣故、於賢劫中值最後仏名曰樓至、於彼仏世、罪得除滅。時諸龍等聞是語已、皆悉至心、具其形寿、各受三帰。

「唯だ願わくは哀愍して、我れを救済したまえ。大悲世尊、我等過去世の時を憶念するに、仏法の中に於て出家することを得ると雖も、備さには是の如くの種種の惡業を造りき。惡業を以ての故に、無量身を経て三惡道に在りき。亦た余の報を以ての故に、生れて龍の中に在りて極大苦を受く」。仏、諸龍に告げたまわく、「汝等今当に尽く三帰を受け、一心に善を修すべし。此の縁を以ての故に、賢劫の中に於て最後仏の名を樓至と曰うに値いたてまつり、彼の仏の世に於て、罪、除滅することを得べし」。時に諸龍等、是の語を聞き已りて、皆な悉く至心に、其の形寿を尽すまで、各おの三帰を受けたり。

ほとけみづから諸龍を救済しますに、余法なし、余術なし。ただ三帰をさづけまします。過去世に出家せしとき、かつて三帰をうけたりといへども、業報によりて餓龍となれるとき、余法のこれをすくふべきなし。このゆゑに三帰をさづけまします。しるべし、三帰の功德、それ最尊最上、甚深不可思議なりといふこと。世尊すでに証明します、衆生まさに信受すべし。十方の諸仏の名号を称念せしめまします、ただ三帰をさづけまします。仏意の甚深なる、たれかこれを測量せん。いまの衆生、いたづらに各各の一仏の名号を称念せんよりは、すみやかに三帰をうけたてまつるべし。愚闇にして大功德をむなくすることなかれ。

「訳」世尊が在世中に、二十六億の餓えた龍が、一緒に仏の所にやってきて、みな雨が降りそそぐように涙を流して、申し上げた、「どうか願わくは哀れみを垂れて、我れ等をお救い下さい。大悲をもてる世尊よ、我れ等は過去の世を思い返す時、仏法の中で、出家することはできても、これこれの種々の惡業を造つてまいりました。この惡業の結果、無量の身に生まれ変わつて、三惡道に墮ちました。さらにその他の報いの結果、龍の中に生まれ変わり、極大の苦しみを受けてました」。仏は諸龍に告げられた、「君達は今ま總て三帰を受けて、一心に善業を修しなさい。この善き因縁の結果、賢劫の中で、最後の仏に遭

遇するだろう。その仏の名を樓至と言ひ、その仏の世において、罪は除滅されるであらう。その時、諸の龍等は「この語を聞き已りて、みな悉く真心を尽くして、一生涯を終えるまで、各々が三帰を受けたのである。」

仏でさえも諸龍をお救いなされるのに、その他の方法はなく、その他のやり方はないのである。ただ三帰を授けられるだけなのである。(これらの諸龍が)過去世に出家した時、かつて三帰を受けたといつても、悪業の報いによつて餓えた龍となつた場合には、その他の方法でもつてこれらをお救いになることはできないのである。このことから、三帰を授けられたのである。三帰による善業を積み重ねて得られた力は、最も尊く最上であり、甚深にして不可思議であることを知ることができるのである。このことは世尊がすでに証明しておられるのであるから、衆生は必ず信受しなければならぬ。十方の諸仏の名号を称念となえさせられたのではなく、ただ三帰を授けられたのである。仏の意図の甚深なることを、誰が推量しようか。いまの衆生は、いたずらに各々が一仏の名号を称念するよりは、速やかに三帰を受けたてまつらねばならない。そのことを何も知らずに、偉大な三帰による善業を積み重ねて得られる力をなくしてしまつてはならない。

(六)(2) 爾時衆中有盲龍女、口中臙爛、滿諸雜虫、狀如屎尿。乃至穢惡猶若婦人根中不淨。臊臭難看。種種噬食、膿血流出。一切身分、常有蚊虻諸惡毒蠅之所啖食、身體臭处、難可見聞。爾時世尊、以大悲心、見彼龍婦眼盲困苦如是、問言、妹何緣故得此惡身、於過去世曾為何業。龍婦答言、世尊、我今此身、衆苦逼迫無暫時停。設復欲言、而不能說。我念過去三十六億、於百千年、惡龍中受如是苦、乃至日夜剎那不停。為我往昔九十一劫、於毘婆尸仏法中、作比丘尼、思念欲事、過於醉人。雖復出家不能如法。於伽藍內敷施牀褥、數數犯於非梵行事、以快欲心、生大樂受。或貪求他物、多受信施。以如是故、於九十一劫、常不得受天人之身、恒三惡道受諸燒煮。仏又問言、若如是者、此中劫尽、妹何処生。龍婦答言、我以過去業力因緣、生余世界、彼劫尽時、惡業風吹、還來生此。時彼龍婦、説此語已作如是言、大悲世尊、願救濟我、願救濟我。爾時世尊、以手掬水、告龍女言、此水名為瞋陀留脂藥和。我今誠美発言語汝、我於往昔、為救餓故、棄捨身命、終不疑念起慳惜心。此言若実、令汝惡患、悉皆除瘥。時仏世尊、以口含水、灑彼盲龍婦女之身、一切惡患臭処皆瘥。既得瘥已、作如是説言、我今於仏、乞受三帰。是時世尊、即為龍女授三帰依。

爾の時に衆中に盲龍女有りき。口中臙爛し、諸の雜虫滿てり、狀、屎尿の如し。乃至穢惡なること猶お婦人の根中の不

淨の若し。臊臭そうじゅう看難し。種種に噬食せじせられて、膿血流出す。一切の身分、常に蚊虻諸の惡毒蠅に咬食くわじせらるる有り、身体の臭処、見聞すべきこと難し。爾の時に世尊、大悲心を以て、彼の龍女の眼め目めに困苦することは如くなるを見たまいて、問うて言わく、「妹、何の縁の故にか此の惡身を得たる、過去世に曾て何の業をか爲りし」。龍婦答えて言さく、「世尊、我が今ま此の身、衆苦逼迫して暫時も停まること無し。設し復た言わんと欲うも、而も説くこと能わじ。我れ過去三十六億を念うに、百千年に於て、惡龍の中に是の如くの苦を受け、乃至日夜刹那も停まざりき。我が往昔九十一劫を爲うに、毘婆尸法の法の中に於て、比丘尼と作り、欲事を思念すること醉人よりも過ぎたり。出家すと雖復も、如法なること能わす。伽藍の内に牀褥を敷施しきて、数数非梵行の事を犯し、以て欲心を快くして大樂受を生じき。或いは他の物を貪求し、多く信施を受く。是の如くなるを以ての故に、九十一劫に、常に天人の身を受くること得ず、恒に三惡道にして諸の燒煮を受けき」。仏、又た問うて言わく、「若し是の如くならば、此中の劫尽きて、妹、何れの処にか生ずべき」。龍婦答えて言さく、「我れ過去の業力の因縁を以て、余の世界に生れ、彼の劫尽くる時、惡業の風吹いて、遷た來つて此に生ずべし」。時に彼の龍婦、此の語を説き已りて是の如くの言を作さく、「大悲世尊、願わくは我を救済したまえ、願わくは我を救済したまえ」。爾の時、世尊、手を以て水を掬すくい、龍女に告げて言わく、「此の水を名づけて瞋陀留脂しんたろじ薬和と爲す。我れ今ま誠実に言を發して汝に語らん、我れ往昔に於て、鰥を救はんが爲の故に、身命を棄捨すてしも、終に疑念して慳惜の心を起さざりき。此の言若し実ならば、汝が惡患をして悉く皆に除瘡じよさしむべし」。時に仏世尊、口を以て水を含み、彼の盲龍婦女の身に灑そそぎたまうに、一切の惡患臭処そそ皆な瘡かさえたり。既に瘡ゆることを得已りて、是の如くの説を作して言さく、「我れ今ま仏に於て、三帰を受けんことを乞ふ」。是の時に世尊、即ち龍女の爲に三帰依を授けたまえり。

この龍女、むかしは毘婆尸法の法のなかに比丘尼となれり。禁戒を破すといふとも、仏法の通塞を見聞すべし。いまはまのあたり釈迦牟尼仏にあひたてまつりて三帰を乞受す、ほとけより三帰をうけたてまつる、厚殖善根といふべし。見仏の功德、かならず三帰によれり。われら盲龍にあらず、畜身にあらざれども、如来をみたてまつらさず、ほとけにしたがひたてまつりて三帰をうけず、見仏はるかなり、はぢつべし。世尊みづから三帰をさづけまします。しるべし、三帰の功德、それ甚深無量なりといふこと。天帝釈の野干を拜して三帰をうけし、みな三帰の功德の甚深なるによりてなり。

「訳」その時、大勢の中に、目が不自由な一匹の龍の女がいた。口の中は脹れて爛れ、数々の混ざり合った虫でいっぱいとなり、その様子は尿尿のようであった。さらにその汚さは、婦人の生殖器の汚れのようであった。悪臭は見るに耐え難く、様々にかみつかれて、膿や血が流れ出ていた。体のどこの箇所も、いつも蚊や虻や諸の悪毒をもつ蟻がつついて食いあい、体の嫌な臭いのある処は、見聞きに耐えなかった。その時、世尊は、偉大な慈悲の心で、この雌の龍が目が不自由でこのように苦しんで困っているのを見て、問うて言われた、「妹よ。どんな因縁でこのような悪身に成ったのか。過去世において、今までにどのような悪業をしてきたのか」。雌の龍は答えて言った、「世尊よ。わたしは現在のこの体で、多くの苦しみに襲われて、暫くも止むことはありません。もし言いたいと思っても、説きつくすことはできません。わたしは過去の三十六億年を思い返して、一億年の間に、悪龍の中でこのような苦を受けました。さらに昼夜も一瞬たりとも止むことはありません。わたしは昔の九十一劫に、毘婆尸の法会の中で、比丘尼と作り、淫欲を思念することは、酒に酔ったもの以上でした。出家したとは言え、如法にはできませんでした。伽藍の中で、ベッドに厚い布団を敷き、しばしば淫欲を犯し、欲望の心で、大いなる快楽を生じました。或はその他の人の物を貪り求め、信者の布施を求めるのが常でした。このことの結果、九十一劫において、常に天人の身に生まれ変わることはできませんでした。ただ地獄や餓鬼や畜生の三悪道に墮ちつづけ、諸々に焼かれたり煮られたりする苦を受けたのです」。仏はさらに問うて言われた、「もしそのようならば、ここに劫が尽きてしまえば、妹はどこへ生まれますか」。雌の龍は答えて言いました、「わたしは過去の悪業の力の因縁によって、別の世界に生まれ変わります。その所の劫が尽きた時、悪業の風が吹いて、またここに生まれて来るでしょう」。時にその雌の龍は、この語を話し終わると、こう言いました、「大悲をもてる世尊よ、願わくはわたしをお救い下さい」。その時、世尊は、手で水を掬い、龍の女に告げて言われた、「この水は瞋陀留脂薬和と名づける。わたしは今、真実語であなたに語ろう。わたしは昔、鶴を救わんとした結果、生命を捨てました。決して物惜しみする心を全く起こさうとはしませんでした。この言葉がもし真実ならば、あなたの悪い悪いを悉くみな除いてさしあげましょう」。その時、仏世尊は、口に水を含み、その目の不自由な雌の龍の体に注ぐと、一切の悪い悪いの嫌な臭いのある処は、みなすっかり治ってしまった。治ってから、このように言いました、「わたしは今、仏の身元において、三帰を受けたいと望みます」。この時、世尊は、すぐに龍の女に、三帰依を授けられた。

この龍の女は、昔は毘婆尸仏の法会のなかで、比丘尼と成った。禁戒を破ったと言つても、この比丘尼が、仏法に通じているか、塞がっているかを見聞すべきである。今はまのあたり釈迦牟尼仏にお会いして、願つて三帰を受けた。ほとけより三帰をお受けしたのは、深く善根を植えたと言つことができる。仏に見えたという善業を積み重ねて得られた力は、必ず三帰によるのである。われらは目の不自由な龍ではないし、畜生の身に生まれたのでもないけれど、にもかかわらず、如来を見ただまつることなく、仏に従いたてまつりて三帰を受けることなく、仏を見ることはるか遠くである、恥なければならぬ。この話のように世尊ご自身が三帰をお授けになつてゐる。三帰による善業を積み重ねて得られた力は、甚深にして無量であるということを知らねばならない。後に取り上げる天帝釈が野狐を礼拝して三帰を受けたのも、みな三帰による善業を積み重ねて得られた力が甚深であることによるのである。

(七) 仏在迦毘羅衛尼拘陀林時、釈摩男来至仏所、作如是言云、何名爲優婆塞也。仏即爲説、若有善男子善女人、諸根完具、受三帰依、是即名爲優婆塞也。釈摩男言、世尊、云何名爲一分優婆塞。仏言、摩男、若受三帰、及受一戒、是名一分優婆塞。

仏、迦毘羅衛尼拘陀林に在しし時、釈摩男、仏の所に来至して、是の如くの言を作して云く、「何をか名づけて優婆塞と爲すや」。仏即ち爲に説きたまわく、「若し善男子善女人有りて、諸根完具し、三帰依を受けん、是れを即ち名づけて優婆塞と爲す」。釈摩男言さく、「世尊、云何が名づけて一分の優婆塞と爲すや」。仏言わく、「摩男、若し三帰を受け、及び一戒をも受くれば、是れを一分の優婆塞と名づく」。

仏弟子となること、かならず三帰による。いづれの戒をうくるも、かならず三帰をうけて、そのうち諸戒をうくるなり。しかあればすなはち、三帰によりて得戒あるなり。

【訳】 仏が迦毘羅衛（Kapila-vastu）の尼拘陀（Nyagrodha）林におられた時、釈摩男が仏の所にやつて来て、このように言いました。「優婆塞とは何ですか」。仏はそこで説かれた、「もし善男子、善女人がいて、諸の感覚器官が完具して、三帰依を受けるならば、これを優婆塞と名づけるのである」。釈摩男が言いました、「世尊よ、部分的な優婆塞と名づけるのは何ですか」。仏は言われた、「摩男よ、もし三帰を受けるか、あるいは一戒を受けるならば、これを部分的な優婆塞と名づけるのである」。

仏弟子と成ること、かならず三帰によるのである。いかなる戒を受ける場合も、必ず三帰を受けて、その後諸戒を受けるのである。それ故に、三帰を受けて後に戒を得ることになるのである。

(八) 『法句経』云、昔有天帝、自知命終生於驢中、愁憂不已曰、救苦厄者、唯仏世尊。便至仏所、稽首伏地、帰依於仏。未起之間、其命便終生於驢胎。母驢鞭断、破陶家坏器。器主打之、遂傷其胎、還入天帝身中。仏言、殞命之際、帰依三宝、罪対已畢。天帝聞之得初果。

『法句経』に云く、昔し天帝有り、自ら、命終して驢中に生ぜんことを知り、愁憂已ますして曰く、「苦厄を救はん者は、唯だ仏世尊のみなり」。便ち仏の所に至り、稽首伏地し、仏に帰依したてまつる。未だ起たざる間に、其の命便ち終りて驢胎に生ぜり。母の驢、鞭断たれて、陶家の坏器を破りつ。器主之を打つに、遂て其の胎を傷り、天帝の身中に還り入れり。仏言わく、「殞命の際、三宝に帰依したれば、罪対已に畢りぬ。天帝、之を聞きて初果を得たり。

おほよそ世間の苦厄をすくふこと、仏世尊にはしかず。このゆゑに、天帝いそぎ世尊のみもとに詣す。伏地のあひだに命終し、驢胎に生ず。帰仏の功德により、驢母の鞭やぶれて陶家の坏器を踏破す。器主これをつつ、驢母の身いたみて託胎の驢やぶれぬ。すなはち天帝の身にかへりいる。仏説をききて初果をつる、帰依三宝の功德力なり。
しかあればすなはち、世間の苦厄すみやかにはなれて、無上菩提を証得せしむること、かならず帰依三宝のちからなるべし。おほよそ三帰のちから、三悪道をはなるるのみにあらず、天帝釈の身に還入す。天上の果報をうるのみにあらず、須陀洹の聖者となる。まことに三宝の功德海、無量無辺にましますなり。世尊在世は人天この慶幸あり、いま如来滅後、後五百歳(60)のとき、人天いかがせん。しかあれども、如来形像舍利等、なほ世間に現住します。これに帰依したてまつるに、またかみのことくの功德をつるなり。

「訳」 『法句経』に言つてゐる、「昔、天帝がいて、自ら死んで後に驢馬の中に生まれ変わることを知り、絶え間なく憂い悲しんで言いました、「この苦厄をお救いくださいさるのには、ただ仏世尊のみ」。そこで仏の所に行つて、額すき地にひれ伏して、仏に帰依した。起ち上がらない間に、その命は尽きて、驢馬の胎(おなか)に生まれ変わった。その母の驢馬は轡が断ち切れて暴れて、陶

家の坏器を壊してしまつた。怒つた器の持ち主は、驢馬をむち打つた。そこでその胎が傷つき、再び天帝の身に戻つた。仏は言われた、「死の間際に、三宝に帰依していたので、罪は消えてしまつた」。天帝はこの言葉を聞いて初果（須陀洹果）を得たのである。

そもそも、世間の苦厄を救ふことは、仏世尊に及ぶものはない。この故に、天帝は急ぎ世尊のみもとを訪れた。地にひれ伏している間に命は尽きて、驢馬の胎に生まれ変わった。仏に帰依する善業で得られた力により、母の驢馬の轡が切れて、暴れて陶家の坏器を踏み割つた。怒つた器の持ち主は、驢馬をむち打つた。母の驢馬の体は傷ついて、天帝が胎に宿っていた驢馬のお腹は破裂した。そこで天帝の身に戻つて行つた。仏の説を聞いて初果を得たのは、三宝に帰依した善業で得られた力のおかげなのである。

それ故に、速やかに世間の苦厄を離れて、無上菩提を証得ることは、必ず三宝に帰依する力なのである。そもそも、三帰の力は、三悪道を離るるだけではなく、天帝釈の身に元通り戻つたのである。天上界に生まれる果報を得るだけではなく、須陀洹の聖者となつたのである。真に三宝に帰依する善業を積み重ねて得られる海のような力は、無量無辺にあるのである。世尊が在世の間は、人天界にこの慶びと幸せがあつた。今は如来が示滅されて後の、後五百歳の時であり、人天界はどのようにしたらよいであろうか。そうではあるが、如来の仏像や舍利等が、なお世間に現に存在している。これに帰依したてまつるならば、上に述べたのと同様の善業を積み重ねて得られる力を得るのである。

（九） 未曾有経云、⁶³ 仏言、憶念過去無数劫時、毘摩大国徒陀山中、有一野干。而為師子所逐欲食、奔走墮井不能得出。終於三日、開心分死、而説偈言、

禍哉今日苦所逼、便当没命於丘井。

一切万物皆無常、恨不以身飴師子。

南無歸依⁶³十方仏、表知我心淨無己。

時天帝釈闍仏名、肅然毛豎念古仏。

自惟孤露無導師、耽著五欲自沈没。

即与諸天八万衆、飛下詣井欲問詰。
乃見野干在井底、両手攀土不得出。
天帝復自思念言、聖人応念無方術。
我今雖見野干形、斯必菩薩非凡器。
仁者向説非凡言、願為諸天説法要。
於時野干仰答曰、汝為天帝無教訓。
法師在下自処上、都不修敬問法要。
法水清淨能濟人、云何欲得自貢高。
天帝聞是大慚愧、給侍諸天愕然笑。
天王降趾大無利、天帝即時告諸天。
慎勿以此懷驚怖、是我頑蔽德不称。
必当因是聞法要、即為垂下天宝贝。
接取野干出於上、諸天為設甘露食。
野干得食生活望、非意禍中致斯福。
心懷勇躍慶無量。

野干為天帝及諸天広説法要。

『未曾有経』に云く。仏言わく、「過去無數劫時を憶念するに、毘摩大国徒陀山中に一野干有りき。而も師子に逐われ、食われなんとす。奔走して井に墮ちて出づること得ること能わす。三日を経るに、開心して死を分え、而も偈を説いて言く。

禍いなる哉、今日苦に通られ、便当と命を丘井に没せんとす。

一切万物皆な無常なり、恨むらくは身を以て師子に飴わざりしことを。
南無帰依十方仏、我が心淨にして己れ無きことを表知したまえ。

時に天帝釈、仏の名を聞きて、肅然として毛豎ちて古仏を念えり。自ら惟えらく、「孤露にして導師無く、五欲に耽著して自ら沈没す」と。即ち諸天八万衆と与に、飛下して井に詣りて、問詰せんと欲えり。

乃ち野干の井底に在りて、両手をもて土を攀づれども、出づること得ざるを見たり。天帝復た自ら思念して言く、「聖人応に方術無からんと念つべし。」

我れ今ま野干の形を見ると雖も、斯れは必ず菩薩にして凡器に非ざらん。仁者向に説くは、凡言に非ず、願わくは諸天の為に法要を説きたまえ。」

時に野干、仰いで答えて曰く、「汝、天帝として教訓無し。」

法師は下に在りて自らは上に処る、都て敬を修せずして法要を問う。

法水清浄にして能く人を濟う、云何が自ら賈高ならんと欲得うや。」

天帝、是を聞きて大きに慚愧せり。給侍の諸天愕然として笑う。

「天王降趾すれども大きに利無し」。天帝即時に諸天に告ぐらく、

「慎んで此れを以て驚怖を懐くこと勿れ。是れ我が徳を頑蔽して稱げざるなり。」

必ず当に是れに因りて法要を聞くべし。」即ち為に天宝衣を垂下して、

野干を接取して上に出しつ。諸天、為に甘露の食を設け、

野干、食することを得て活望を生ぜり。意わざりき、禍中に斯の福を致さんとは、

心に勇躍を懐きて慶ぶこと無量なり。

野干、天帝及び諸天の為に広く法要を説きき。」

これを天帝拜畜為師の因縁と称す。あきらかにしりぬ、仏名、法名、僧名のききがたきこと、天帝の野干を師とせし、その証なるべし。いまわれら宿善のたすくるによりて、如来の遺法にあふたてまつり、昼夜に三宝の宝号をききたてまつるごとく、時とともにして不退なり。これすなはち「法要」なるべし。天魔波旬なほ三宝に帰依したてまつりて患難をまぬかる、いかにいはんや余者の、三宝の功德におきて積功累徳せらん、はかりしらすぢらめやは。

「訳」 『未曾有経』に言つ。仏は言われた、「過去無數劫を思い返す時、毘摩ヒマ（Vimala）大國の徒陀山シタの中に、一匹の野狐がいた。師子に追いかけられて、食われそうになった。走り逃げる内に井戸に墮ち、出ることができなくなった。三日経ってから、心が開かれ死を覚悟して、偈を説いて言つた、

なんと不幸なことが。今日苦に襲われ、すぐに丘の井戸で死を迎える結果となった。

一切万物はみな無常である。体を師子の餌食にしなかつたことが残念だ。

十方仏に南無し帰依し、我が心を浄めて己を空しくすることを知らしめよう。

時に帝釈天が仏の名を聞いて、心を引き締め身の毛を豎てて、古仏を思い浮かべた。

自ら思つ、「孤りぼつちで導師無く、五つの感覺器官を満足することに耽つて自ら沈没す」と。

そこには、野狐が井戸の底にいて、両手で土をつかんで這い登ろうとするが、出ることのできないを見た。

帝釈天は復び自ら思い浮かべて言つた、「聖人は助かる手だてが尽きたと思つているようだ。

わたしは、今、野狐の姿を見るとはいつても、きつとこれは菩薩で平凡な器ではない。

あなたさまが先に言つた言葉は平凡ではない。願くは神々の為に法要を説かれんことを」。

その時、野狐は仰いで答えた、「あなたは帝釈天として礼儀がわかつてはいない。

法師は下に在られるのに自らは上にふんぞり返る。全く敬わないで法要を問う。

法の水は清浄にして人を救つことができる。どうして自ら高飛車を望もうか」。

帝釈天はこの言葉を聞いて大いに慚愧した。側に任えていた神々はどつと笑つて言つた、

「帝釈天はわざわざ地上に降りても全く利益無し」。帝釈天ただちに神々に告げた、「慎んでこの思いで驚怖してはならない。これはわたしの力を頑固の覆いがかくしているだけだ。

必ずこのことから法要を聞くことになるつ」。そこで天の宝衣を垂らして、

野狐を井戸から引き上げて抱き抱えた。神々は野狐の為に甘露の食を設営した。

野狐は食べることで生きて活きる力を得た。不幸の中にこの幸福がやってこようとは思ひもかけなかった。

そこで、心は湧き躍り、無量の慶びを味わった。

ここに、野狐は、帝釈天や神々の為に広く法要を説いた」。

この話を「帝釈天が畜生を礼拝して師とした因縁」と称している。明かに知った、仏の名、法の名、僧の名の聞くことの困難なことを。帝釈天が野狐を師としたことは、その証拠となるであろう。今われらは過去の善業が結果を引き起こしたことによって、如来の遺された法に逢うことができ、昼夜に三宝の宝号を聞くことができることは、時が経過しても変わることはない。これが法要なのである。天魔の悪者でさえも、なほ三宝に帰依したてまつりて患難を免れている。ましていはんやその他の者が、三宝に帰依する善業の力を、積み重ねているとすれば、利益は計り知ることとはできない。

(十) おほよそ仏子の行道、かならずまづ十方の三宝を敬礼したてまつり、十方の三宝を勧請したてまつりて、そのみまへに焼香散華して、まさに諸行を修するなり。これすなはち古先の勝躰なり、仏祖の古儀なり。もし帰依三宝の儀、いまだかつておこなはざるは、これ外道の法なりとするべし、または天魔の法ならんとするべし。仏仏祖祖の法は、かならずそのはじめに帰依三宝の儀軌あるなり。

正法眼蔵帰依三宝 第六

建長七年乙卯夏安居日、以先師之御草本書写畢。未及中書清書等。定御再治之時有添削歟。於今不可叶其儀。仍御草如此云。

弘安二年己卯夏安居五月廿一日在越宇中浜新善光寺書写之。義雲。

「訳」 そもそも、仏子が道を修行するには、必ず先ず十方の三宝を敬礼したてまつり、十方の三宝を勧請したてまつりて、その御前に香を焼き華を散じて、まさに諸の行を修するのである。これが古先の勝躰さつたうであり、仏祖の古えの儀式である。もし三宝に帰依する儀式を未だかつて行わないのは、これが外道の法であると知らねばならないし、または天魔の法であ

らうと知らねばならない。仏祖の法は、必ずそのはじめに三宝に帰依する儀軌があるのである。
正法眼蔵帰依三宝 第六

建長七年乙卯（一二五五）の夏安居の日、先師道元禪師の御草本をもって書写し畢った。未だ中書、清書等に及んでいないけれども、きつと道元禪師が御再治される時には、添削があったことであろう。お亡くなりなられた今ではその事もかなわない。そこで御草本はこのようであった、と云うことである。

弘安二年己卯（一二七九）の夏安居の五月二十一日に越前の中浜の新善光寺においてこの巻を書写す。義書。

三 おわりに

『帰依仏法僧宝』の構成において重要な引用典籍について、二つの問題を指摘してまとめて置くことにしよう。

一つは、『帰依仏法僧宝』に展開する四種三宝説のことである。この四種三宝説には、道宣（五九六―六六七）撰『釈門帰敬儀』巻上の一体・縁理・化相・住持の四位及び元照（一〇四八―一一一六）撰『四分律行事鈔資持記』巻中一下の一体・化相・理体・住持の四位の説等のように四分律關係で説かれている。『帰依仏法僧宝』の場合は、懷顕『律宗新学名句』によるのであり、このことを最初に指摘したのは、林鳴宇氏の「成立背景から見た『仏祖正伝菩薩戒作法』の意義」（『宗学研究』第四二号、二〇〇〇年三月）であり、この指摘は『正法眼蔵』の他の箇所においても認められるのであり、林氏の指摘は重要であって、今後検討すべき課題であろう。つまり、『律宗新学名句』巻上には、『眼蔵』の順序でいえば、次のようにある。（原文は化相・住持・一体・理体の四種三宝の順である）

住持三宝。形像塔廟、仏宝。紙素所伝、法宝。戒法儀相、僧宝。

化相三宝。釈迦世尊、仏宝。流布諦教、法宝。五拘隣等、僧宝。

理体三宝。五分法身、名爲仏宝。滅理無爲、名爲法宝。声聞学無学功德、僧宝。

一体三宝。照理覚了、名爲仏宝。至理無滞和合、僧宝。体離名言、名爲法宝。（統蔵卷一〇五 三二二右）。

この四種三宝説が説かれる以前は、『帰依仏法僧宝』は、基本的には『大乘義章』で展開してきた。ところが、『大乘義章』

卷十は、三種三宝説であり、道元はこの説を取らないのである。後に関連の文を示すが、この説を整理して示すと次のようになる。

別相三宝。階梯三宝ともいふ。仏は上、法は中、僧を最下と爲す。故に階梯と曰ふ(『涅槃經』如来性品による)。(大正卷四四 六五四b)

一体三宝。同体三宝、同相三宝ともいふ。(『四種三宝の一体三宝に当たる。』同 六五七a)

住持三宝。小乘法の住持三宝(『四種三宝の住持三宝に当たる。』・化用の住持三宝(『四種三宝の化儀三宝に当たる。』・実徳の住持三宝(『四種三宝の理体三宝に当たる。』に分かつ。)(同)

更に複雑な問題は、『仏祖正伝菩薩戒教授戒文』も三種三宝説なのである。

三宝に三種の功徳有り。所謂る、一体三宝、現前三宝、住持三宝なり。(筑摩書房本巻下 二七九頁)

これら四種三宝説と三種三宝説を『帰依仏法僧宝』の四種三宝説の順に關係を見てみよう。

(1) 住持三宝。形像塔廟、仏宝。黄紙朱軸所伝、法宝。剃髮染衣、戒法儀相、僧宝。

水野弥穗子氏は補注で、元照撰『四分律行事鈔資持記』巻中一下との関連を指摘しているが、確かに近い説といえる。

三宝に四位有り。初には一体……(中略)……。四には住持 形像 經卷、削染なり。(大正四〇 二八〇a)

道宣の『釈門帰敬儀』の住持三宝では、次のようになる。

俗を開いて務と成し、信を発して心に帰し、実に敷説の勞を仮り、誠に相状の力を資くるを僧宝と名づく。説く所の名句は、理を表わすを先と爲し、理は文言に非ずして悟を取るに由無し。故に名教説聽の縁に約するを法宝と名づく。此の理は幽奥にして、聖に非ざれば知らず。聖は亡すと云つと雖も、影像斯に立つるを仏宝と名づく。(大正四五 八五七c)

道元の『教授戒文』は次のようになる。

天上を化し、人間を化し、或いは虚空に現じ、或いは塵中に現するは、乃ち仏宝なり。或いは海蔵に転じ、或いは貝葉に転じ、物を化し生を化するは、法宝なり。一切の苦を度し、三界の宅を脱するは、乃ち僧宝なり。是れ住持三宝なり。(筑摩書房本巻下 二七九頁)

三種三宝の住持三宝は、『大乘義章』卷十には、次のようにある。

住持は如何。小乘法の中には、泥龕木像を住持の仏と爲し、綿素竹帛を住持の法と爲し、凡夫比丘を住持の僧と爲す。大乘法の中には、住持に二有り。一には化用住持、二には実徳住持なり。化用と言うは、諸仏如来大悲の作用、法界に充遍して八相成道(下天・託胎・降誕・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃)するを住持の仏と爲し、化に随いて説く所の一切の言教流布して、世を益するを住持の法と爲し、法化に依つて成ずる三乗の諸衆を住持の僧と爲す。実徳とは如何。諸仏如来の法身常住なるを住持の仏と爲し、法性常住を住持の法と爲し、諸仏如来の僧行滅せざるを住持の僧と爲す。(大正四四六五七^a)

このことから『帰依仏法僧宝』の説は、ここでは住持三宝の中の小乘法に相当する。

(2) 化儀三宝。釈迦牟尼世尊、仏宝。所転法輪、流布聖教、法宝。阿若憍陳如等五人、僧宝。

水野氏の指摘する『四分律行事鈔資持記』巻中一下は、「化相三宝」となっているが、近い説といえる。

三宝に四位有り。……二には化相 釈迦、四諦、五(人)の具隣(＝憍陳如)などなり。(大正四〇二八〇^a)

化儀とは教化の儀式、方法をいう。前述の『大乘義章』の化用の住持三宝に相当する。『釈門帰敬儀』の化相三宝とは、次のようにある。

謂く、釈迦如来を仏宝と爲すなり。説く所の滅諦を法宝と爲すなり。先に智(ま)り苦を尽くすを僧宝と爲すなり。(同 八五七^b)

『教授戒文』は、三宝に三種功德があるとして、一体三宝と住持三宝と現前三宝の三つに分けるので、現前三宝が「化儀」と「理体」を含むことになり、「現前三宝」を見ると次のようにある。

現在、菩提を証するを仏宝と名づく。仏の証する所は是れ法宝なり。仏法を学するは是れ僧宝なり。是れを現前三宝と名づく。(同 二七九頁)

阿若憍陳如の名は、『仏垂般涅槃略説教誡經』つまり『仏遺教經』に「釈迦牟尼仏、初めに法輪を転じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう」(大正二二一一〇c)とあつて知られているが、阿若憍陳如は、阿若拘隣、阿若居隣、阿若多憍陳如と訳される。『陀羅尼』には、この時の五人が示されている。

みづから帰依の正信おこれば、かならず北面の禮拜、そのはじめにおこなはると正伝せり。このゆゑに、世尊の在日に、

帰仏の人衆・天衆・龍衆、ともに北面にして世尊を恭敬礼拝してまつる。最初には、阿若憍陳如 亦曰拘隣・阿濕卑亦曰阿陞・摩訶摩南 亦曰摩訶拘利・婆提 亦曰跋提・婆敷 亦名十力迦葉。この五人のともがら、如来成道のち、おぼえずして起立し、如来にむかひたてまつりて、北面の礼拝を供養したてまつる。外道魔党、すでに邪をすてて帰仏するときは、必定して自擣他擣せざれども、北面礼拝するなり」(岩波文庫本三 一〇八〜九頁)

この釈尊伝の引用は、水野弥穗子氏が補注で指摘するように、「中本起経」巻上の「転法輪品一」(大正四 一四七c〜八a)にほぼ間違いないが、実は五人の比丘名は、これまた「律宗新学名句」巻中の次の説なのである。

五拘隣 受戒踰度。一、阿若憍陳如 亦云拘隣。二、阿濕卑 亦云阿陞。三、摩訶摩南 亦云摩訶拘利。四、婆提 亦曰跋提。五、婆敷 亦名十力迦葉(前掲書 三二八右)

(3) 理体三宝。五分法身、名爲仏宝。滅理無爲、名爲法宝。学無学功德、名爲僧宝。『四分律行事鈔資持記』巻中一下の説は、確かに近い関係にある。

三宝に四位有り。……三には理体 五分法身、滅諦・涅槃、学無学の功德なり。(大正四〇 二八〇a)

『釈門帰敬儀』の縁理三宝(=理体三宝)とは、次のようにある。

故に論に云く、仏に帰依するとは、謂く、一切智の五分の法身なり。法に帰依するとは、謂く、滅諦・涅槃なり。僧に帰依するとは、謂く、諸の賢聖の学無学の功德、自身他身の尽くる処なり」(同 八五七a)

『大乘義章』では、先に述べた実徳の住持三宝に当たる。『四分律行事鈔資持記』巻上一上には、「三宝舟航とは、三宝に四種あり。一体と理体は、理に就いて論ず。化相の一種は局りて仏世に拠る。住持の一位は通じて三時に被むる」(同 一六〇c)とも説いている。ここでいう五分法身とは、戒・定・慧・解脱・解脫知見をいう。

(4) 一体三宝。証理大賞、名爲仏宝。清淨離染、名爲法宝。至理和合、無擁無滞、名爲僧宝。

『四分律行事鈔資持記』巻中一下は、近い説といえるが語句的には簡単な表現となっている。

三宝に四位有り。初には一体 衆生の心性に覺了、軌持、和合の義を具する。故に此には大乘に同るなり(大正四〇 二八〇a)。

その点では、『釈門帰敬儀』の一体三宝の説の方が、語句的には近いと言えよう。

覺は即ち仏なり。性淨無染は法なり。性淨無塵は僧なり(同 八五六)

『教授戒文』の一体三宝は、「阿耨多羅三藐三菩提を稱して仏宝と爲す。清淨離塵は乃ち是れ法宝なり。和合功德は僧宝なり」(前掲書)とあつて、語句まで全く一致する説ではない。

道元の三宝説も一つではないが、このように見てくると、『帰依仏法僧宝』の説が『律宗新学名句』に近いといつ新たな問題提起は重要であることが理解できよう。

次の引用は十二巻本『正法眼蔵』の大きな特色として既にいくつかの例で検討してきた天台典籍との関連である。最初は第五段の構成を二分した二つの引用典籍の『希有経』と『増一阿含経』の問題である。その引用は次のようになってゐる。

(1) 希有経云、教化四天下及六欲天、皆得四果、不如一人受三帰功德。

(2) 増一阿含経云、有切利天子、五衰相現、当生猪中。愁憂之声、聞於天帝。天帝聞之、喚來告曰、汝可帰依三宝。即時如教、便免生猪。仏説偈言、諸有帰依仏、不墜三惡道。尽漏処人天、便当至涅槃。受三帰已、生長者家、遷得出家、成於無学。

水野弥穂子氏は『希有校量功德経』(大正巻一六 七八三c)の取意と『増一阿含経』巻二四(大正巻一 六七七c~ハa)とす。元来の經典としては間違いないであろう。しかし、ここは明らかに荆溪湛然の『法華玄義釈籤』巻一〇からの『希有経』と『増一阿含経』との孫引きであることは確実なのである。

三帰者、準希有経中、広校量三帰功德云、教四天下及六欲天、得四果、不如三帰依功德多。

又如増一中、有切利

天子、五衰相現、当生猪中。愁憂之声、聞於天帝。天帝聞之、喚來告曰、汝可三帰。即時如教、便免生猪。仏説偈云、諸有帰依仏、不墜三惡趣。尽漏処人天、便当至涅槃。三自帰已、生長者家、遷得出家、成於無学。(大正三三 八八四a)。

しかも、智顛の『法華玄義』巻四下(大正巻三三 七二六c)の迹中十妙の第四の位妙を明かす中の「三帰」について釈したところである。『釈籤』が「三帰とは」で説明されていることから判明しよう。道元が『帰依仏法僧宝』の巻を撰述するに当たつて確実に天台典籍を基本にしているその一つの例である。

次に第八段に『法句経』の引用がある。ここも『法句譬喻経』巻一(大正四 五七五b c)の直接の引用ではなく、語句を検討すると、明らかに次の荆溪湛然の『止観輔行伝弘決』巻四之二からの孫引きである。

翻破不畏惡道心者、念彼惡道、如聞鈴聲、不久斷頭。法句經云、昔有天帝、自知命終生於驢中、愁憂不已云、救苦厄者、唯仏世尊。便至仏所、稽首伏地、帰依於仏。未起之間、其命便終生於驢胎。輻斷破他陶家坏器、器主打之、遂傷其胎、還入天帝身中。仏言、殞命之際、帰依三宝、罪対已畢。天帝聞之得初果。故暫帰依即能翻破惡道心也。（大正四六 二五九c）

『摩訶止観』卷四上の具五縁（持戒清浄・衣食具足・閑居静処・息諸縁務・得善知識）の第一の持戒清浄を四意（列戒名・明持戒・明犯戒・明懺悔）に開き、明懺悔の逆流の十心の第三「怖畏惡道」を明かすところの釈である。この「持戒清浄」の列戒名には、三帰が説かれ、「輔行伝弘決」卷四之一（同 一五三b）には、『帰依仏法僧宝』の四段の「俱舍論」の大半が引用されている。更に「明犯戒」の文が『輔行伝弘決』と共に、『四禅比丘』に引用されていることは、『四禅比丘』考（五六頁とその註）で既に指摘したことである。

第三は、第九段の『未曾有経』の引用である。この引用については、鏡島元隆氏により指摘されているが確認しておきたい。この箇所も第八段に続いて『輔行伝弘決』なのである。まず、元来の『未曾有因縁経』卷上を見てみよう。

仏言。憶念過去無數劫時、毘摩大國、徙陀山中、有一野干。有師子王追逐欲食。野干惶怖奔走、墮一丘井、不能得出。經於三日、開心分死、而説偈言、

禍哉今日苦所逼、便当没命於丘井。

一切万物皆無常、恨不以身餒師子。

嗚呼奈何罪厄身、貪惜軀命無功死。

無功而死尚可恨、況復臭身汚人水。

南無懺悔十方仏、表知我心淨無己。

前世所造三業罪、願於今身償令畢。

衆罪畢了三業淨、其心不動念真實。

從是世世遭明師、如法修行速成仏。

時天帝釈闍仏名、肅然毛豎念古仏。

自惟孤露無師導、耽著五欲自沈没。

不能得出恩愛獄、
即与諸天八万衆、
乃見野干在井底、
天帝復自思念言、
今我雖見野干形、
今當請問除我疑、
天帝曰、
不聞聖教曠大久、
仁者向說非凡語、
於時野干仰答曰、
不知時宜甚癡傲、
都不修敬問法要、
云何欲得懷真高、
給侍諸天愕然笑、
而被慚恥甚可悼、
慎莫以此為驚怪、
必當因是聞法要、
接取野干出於上、
叩頭懺悔願垂亮、
纏綿五欲致迷荒、
為說苦樂常無常、
野干得食生活望、
思惟感切目下淚、
飛下詣井欲問訊、
兩手攀土不能出、
聖人心現無方術、
斯必菩薩非凡器、
并令諸天得聞法、
常処幽冥無師導、
願為諸天宣法教、
汝為天帝無教訓、
法師在下自処上、
法水清淨能濟人、
天帝聞是大慚愧、
天王降止大無利、
帝釈即時告諸天、
是我頑弊行不称、
即時垂下天宝贝、
叉手辭謝說不是、
諸天笑爾如尊誨、
皆由不遇善師導、
諸天為設甘露食、
非意禍中致斯福、

心懷踊躍慶無量。

於是野干、心自念言、畜生道中、醜弊困厄、無過野干。智慧力故、乃致如是。

以上のように、『歸依仏法僧宝』には多くの省略文が存する。ところが、『輔行伝弘決』巻四之四とは、ほとんど次のように一致するのである。

一致するのである。

天帝拜畜為師者、未曾有經上卷。仏言、憶念過去無數劫時、毘摩大國徒陀山中、有一野干。而為師子所逐欲食。奔走墮井不能得出。經於三日、開心分死、而說偈言、

禍哉今日苦所逼、便当没命於丘井。

一切万物皆無常、恨不以身飴師子。

南無歸命十方仏、表知我心淨無己。

時天帝釈闍仏名、肅然毛豎念古仏。

自惟孤露無導師、耽著五欲自沈沒。

即与諸天八万衆、飛下詣井欲問詰。

乃見野干在井底、両手攀土不得出。

天帝復自思念言、聖人応念無方術。

我今雖見野干形、斯必菩薩非凡器。

仁者向説非凡言、願為諸天説法要。

於是野干仰答曰、汝為天帝無教訓。

法師在下自処上、都不修敬問法要。

法水清淨能濟人、云何欲得自貢高。

天帝闍是大慚愧、給侍諸天愕然笑。

天王降趾大無利、天帝即時告諸天。

（大正卷一七 五七六c~七b。偈中の『輔行伝弘決』の省略箇所）

慎勿以此懷驚怖。是我頑蔽德不称

必当因是闡法要。即為垂下天宝贝、

接取野干出於上。諸天為設甘露食、

野干得食生活望。非意禍中致斯福。

心懷踊躍慶無量。(大正四六 二七二a、b)

『未曾有經』の原典に従って、偈文として見たが、『帰依仏法僧宝』ではそのことは強く意識されてはいないと考えられよう。『帰依仏法僧宝』はこの話を引用して後に、「これを天帝釋奮為師の因縁と称す」とあるが、これは明らかに『摩訶止観』巻四下の遠方便の五略説(具五縁・阿五欲・棄五蓋・調五事・行五法)の棄五蓋を説く中の、「天帝釋奮為師」(前掲書 四五r)の語であり、その語を承けて『輔行伝弘決』が『未曾有經』を引用しているのである。道元が引用するに当たって、「天帝釋奮為師の因縁」として既に熟知の話として引用しているところは注意してよいであろう。もともと阿五欲に引用される『輔行伝弘決』巻四之三の『入胎蔵経』(大正四六 二六九a、b)や四種三昧の常行三昧に引用される『増一第三』(同 二六七a)は、『知事清規』に引用されて有名である(筑摩書房本 三三〇、一頁・三三六頁)。このように道元の天台典籍の引用は説示上において縦横無尽になされていると言ってしまうであろう。更に興味深いのは、『帰依仏法僧宝』では「南無帰依十方仏」の「帰依」とあるところが、本来の原典の『未曾有經』では「懺悔」となっていて、『輔行伝弘決』では「帰命」とある。「帰依」と「帰命」にその意味に相違はないとしても、やはりこの巻の『帰依仏法僧宝』の巻名と関連することは間違いないであろう。

これらの三例を通して、『帰依仏法僧宝』もまた引用典籍から見ると、天台典籍が駆使されていることが判明したが、このことは既に指摘するように十二巻本『正法眼蔵』の二つの傾向を示唆するものと考えてよいであろう。

以上、二つの問題に絞って、『帰依仏法僧宝』の問題点を指摘してみた。

最後に付記しておかねばならないことがある。秋田の宗務所・禅センター主催の講座「祖録に親しむ」十二巻本正法眼蔵で『帰依仏法僧宝』を担当したのは、一九九八年一〇月二〇・二二日であった。その時、『帰依仏法僧宝』と密接な関係のある『道心』(大本山永平寺所蔵の秘蔵『正法眼蔵』では「仏道」とある)をも講読した。現代語訳の必要ないような平易な箇所も多い

が、ここに試訳を付し、しかも『帰依仏法僧宝』の巻と深く関連することを指摘しておくことにしよう。

「付」 試訳『道心』

『道心』の構成を次のように五段に分ける。(下段の数字は岩波文庫本(四)の頁数)

- (一) 求道は道心を先とす 四七〇頁
- (二) 次に帰依仏法僧宝 四七一頁
- (三) 生涯で造仏供養 四七四頁
- (四) 法華経の所持供養 四七四頁
- (五) 袈裟の坐禅 四七四頁

道心

(一) 仏道をもとむるには、まづ道心をさきとすべし。道心のありやう、しれる人まれなり。あきらかにしれらん人に問ふべし。

よの人は道心ありといへども、まことには道心なき人あり。まことに道心ありて、人にしられざる人あり。かくのごとくありなししがたし。おほかた、おろかにあしき人のことばを信ぜず、きかざるなり。また、わがこころをさきとせざれ、仏のとかせたまひたるのりをさきとすべし。よくよく道心あるべきやうを、よるひるつねにこころにかけて、この世にいかでかまことの菩提あらましと、ねがひいのるべし。

世のすゑには、まことある道心者、おほかたなし。しかあれども、しばらく心を無常にかけて、世のはかなく、人のいのちのあやぶきこと、わすれざるべし。われは世のはかなきことをおもふと、しられざるべし。あひかまへて、法をおもへて、わが身、我がいのちをかるくすべし。法のためには、身もいのちもをしめざるべし。

「訳」 道心

仏道を求めるには、まず道心を先としなければならぬ。道心のあり方を、知っている人は稀である。その為には明らかに知っていると思われる人に問わねばならぬ。

世間の人が道心があると云つても、実際には道心のない人がいる。実際に道心があつても、人に知られない人もいる。このように、あるか無いかを知ることは難しい。だが、大体は、愚かにも悪い人の言葉を信用しないで、聞かないことである。また、自我心を先としてはならない、そうではなくて、仏がお説きになられた教え（法）を先としなければならぬ。道心のあるべきあり方を、昼も夜も常に心に掛けて、この世においてどのようにしたら眞実の菩提が実現できるかと、よくよく願ひ祈らねばならぬ。

末世には、眞実の道心をもつ者は、ほとんどいない。しかしながら、しばらくの間、無常を觀つめて、世がはかないものであり、人の命はいつ亡くなるかわからないということ、忘れないようにしなければならぬ。だが、自分は世がはかないことを思うだけでは、知られないにちがいない。無常を自己の眞つ正面から取り組み、眞実の教えを重んじて、自己の身体や、自己の命を軽くしなければならぬ。眞実の教えのためには、身体も命も惜しんではならぬ。

(一) つぎには、ふかく仏法僧三宝をうやまひたてまつるべし。生をかへ身をかへても、三宝を供養し、うやまひたてまつらんことをねがふべし。ねてもさめても三宝の功德をおもひたてまつるべし、ねてもさめても三宝をとなへたてまつるべし。たとひこの生をすてて、いまだ後の生にむまれざらんそのあひだ、中有と云ふことあり。そのいのち七日なる、そのあひだもつねにこそもやまず三宝をとなへたてまつらんとおもふべし。七日をへぬれば、中有にて死して、また中有の身をうけて七日あり。いかにひさしいへども、七七日をばすぎず。このとき、なにことを見きくもさはりなきこと、天眼のことし。かからんとき、心をはげまして三宝をとなへたてまつり、

南無歸依仏、南無歸依法、南無歸依僧

となへたてまつらんこと、わすれず、ひまなく、となへたてまつるべし。

すでに中有をすぎて、父母のほとりにちかつかんとときも、あひかまへてあひかまへて、正知ありて託胎せん。処胎蔵にありても、三宝をとなへたてまつるべし。むまれおちんときも、となへたてまつらんこと、おこたらざらん。六根に入て、三宝をくやうじたてまつり、となへたてまつり、帰依したてまつらんと、ふかくねがふべし。

またこの生のをはるときは、二つの眼たちまちにくらくなるべし。そのときを、すでに生のをはりとしりて、はげみて南無佛依仏となへたてまつるべし。このとき、十方の諸佛、あはれみをたれさせたまふ。縁ありて悪趣におもむくべきつみも、轉じて天上にむまれ、仏前にうまれて、ほとけををがみたてまつり、仏のとかせたまふのりをきくなり。

眼の前にやみのきたらんよりのちは、たゆまずはげみて三歸依となへたてまつること、中有までも後生までも、おこたるべからず。かくのごとくして、生生世世をつくしてとなへたてまつるべし。仏果菩提にいたらんまでも、おこたらざるべし。これ諸仏菩薩のおこなはせたまふみちなり。これを深く法（のり）をさるとも云ふ、仏道の身にそなはるとも云ふなり。さらにことおもひをまじへざらんとねがふべし。

「訳」 次には、深く仏法僧の三宝を敬い奉らねばならぬ。生所を易（か）え人身を易えても、三宝を供養し、敬い奉ることを願わねばならない。寝ている時も目覚めている時も三宝を敬い奉りて得られた力を思わねばならない。あるいは、寝ている時も目覚めている時も三宝を唱え奉らなければならぬ。たといこの生を終えても、いまだ次の生に生れ変わらぬ間の間に、中有というところがある。その命は七日であり、その間も、常に声のとぎれることなく三宝を唱え奉らうと思わねばならない。七日を経過すれば、中有で死んでしまつて、また次の中有の身に生まれ変わり更に七日がある。どんなに長くとも、四九（七七）日を過ぎることはない。この時、何を見ても聞いても自由自在のようすは、あたかも天眼のようである。このような時に、心を励まして三宝を唱え奉るのである。

「南無佛依仏、南無佛依法、南無佛依僧」と。

このように唱え奉らうと忘れずに、とぎれることなく唱え奉らねばならない。

既に中有を経過して、次の生の父母の身辺に近づかん時も、よくよく心して、正知をもつて母胎に宿るがよい。母胎に宿つていても、その間に三宝を唱え奉らなければならぬ。生れようとする時も、唱え奉らうとすることを、怠らないようにしよ

う。六根（眼・耳・鼻・舌・身・意の各根）全体で、三宝を供養し奉り、唱え奉り、皈依し奉らうと、深く願わねばならない。また、この生が終る時は、二つの眼は一瞬に暗くなるに違いない。その時が、既に生の終りと察知して、心勵まして南無帰依仏と唱え奉らねばならない。この時、十方の諸仏は、あわれみを垂れられるのである。因縁によりて悪道（地獄・餓鬼・畜生）に墮ちるべき罪も、逆転して天上界に生まれ、仏前に生れて、仏を拝み奉り、仏のお説きになられた教えを聞くのである。眼の前に暗闇が到来した後は、絶えず心を勵まして三帰依を唱え奉ることを、中有までも、後生までも、怠ってはならない。このように生生世世の全てに亘って三宝を唱え奉らねばならない。仏果菩提を得るまで、怠ってはならない。これが諸仏菩薩の行われた道なのである。このことを深く法をさとるとも言つのである。また、仏道が身に着いたとも言つのである。更に別の思いを混雜しないようにと願わねばならない。

(三) 又、一生のうちに仏をつくりたてまつらんといとなむべし。つくりたてまつりては、三種の供養じたてまつるべし。三種とは、草座、石蜜漿、燃燈なり。これをくやうじたてまつるべし。

「訳」 また、一生のうちに仏像を造り奉らうと努めなければならぬ。造り奉っては、三種の供養を奉らなければならぬ。その三種とは、草座、石蜜漿、燃燈である。これらを供養し奉らねばならない。

(四) 又、この生のうちに、法華經をつくりたてまつるべし。かきもし、摺写もしたてまつりて、たもちたてまつるべし。つねにほいただき、礼拝したてまつり、華香、みあかし、飲食衣服もまゐらすべし。つねにほいただきをきよくして、いただきまゐらすべし。

「訳」 また、この生のうちに、『法華經』を作り奉らねばならない。書写したり、版木に刷つて奉ったりして、所持し奉らねばならない。常日頃には、頭上に頂き、礼拝し奉り、華や香や燈明や飲食衣服をも差し上げなければならぬ。常に頭の頂を清潔にして、拝受しなければならぬ。

(五) 又、つねにけさをかけて坐禅すべし。袈裟は、第三生に得道する先蹤あり。すでに三世の諸仏の衣なり、功德はかるべからず。坐禅は三界の法にあらず、仏祖の法なり。

正法眼蔵 道心

「訳」 また、常に袈裟をかけて坐禅しなければならぬ。袈裟は、第三生に得道した先例がある。三世の諸仏の衣であるからには、善業を積み重ねて得られた力は数量では言い表せない。坐禅は三界（欲界・色界・無色界）の迷いの世界の教えではなく、仏祖の教えなのである。

正法眼蔵 道心

註

- (1) この上堂は……上堂の例話は、もちろん「仏の法身を見る」ことではあるが、具体的な生き方で考えれば、極めて深刻な問題と
言わざるを得ない。
- (2) 最初の論文に「石井修道」「深信因果」「三時業」考（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五八号、二〇〇〇年三月）。
- (3) 前回は……「石井修道」「供養諸仏」考（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六〇号、二〇〇二年三月）でその経過を述べた。
- (4) 菩提心を……周知のように、近年の宗学研究において十二巻本『正法眼蔵』を改めて最重要だと主張したのは、袴谷憲昭氏の功績によるものである。氏の「十二巻本『正法眼蔵』撰述説再考」（『宗学研究』第三〇号、一九八八年三月、後に『本覚思想批判』に再録、大蔵出版、一九八九年七月）に対して、鍋島元隆氏は「十二巻本『正法眼蔵』について」（『駒澤大学仏教学部論集』第一九号、一九八八年一〇月、後に『道元禅師とその宗風』に再録、春秋社、一九九四年一月）の中で、「袴谷教授の功績」として、「自未得度先度他」の道元禅の衆生救済の論理が、七十五巻『正法眼蔵』からは導き出すことは困難であるが、十二巻本『正法眼蔵』にいたってはじめて現れることを明らかにした点を認めている。
- (5) 帰依仏法僧宝＝帰依とは、*sarāna* あるいは *namas* といい、信と訳す。後の二段（1）に解説がある。後註（18）参照。仏法僧の三

宝についても、本文中に詳しい。

- (6) 禅苑清規曰「『禅苑清規』長蘆宗頤撰。現存最古の清規。鏡島元隆・佐藤達玄・小坂機融共著の訓注本『訳注禅苑清規』(曹洞宗宗務庁、一九七二年七月)がある。この引用は巻十(二八五頁)による。既に第一『出家功德』(同 一〇四頁)、第二『受戒』(同 一〇六頁)に引用される。

- (7) 問「洞雲寺本は「門」に誤る。

- (8) 西天東土……『修証義』第三章第一節に引用。

- (9) この帰依仏法僧の功德……以下「を成就するなり」まで、『修証義』第三章第一四節に引用。

- (10) 感応道交「法華文句」巻上に「因縁亦た感応と名づく。衆生機無ければ、近づくと雖も見えず。慈善根の力は、遠くして自ら通ず。感応道交する故に」(大正三四 一一a)とある。第四『發菩提心』に「感応道交するところに、發菩提心するなり。諸仏菩薩の所授にあらず、みづからが所能にあらず。感応道交するに発心するゆゑに、自然にあらず」(同 一七八頁)とあるのを参照。

- (11) 断善根「水野弥穂子脚注に『俱舍論』巻一七の「諸の断善根は何なる業道に由る。断と統との善根の差別云何。頌に曰く、唯だ邪見のみ善を断ず。所断は欲(界)の生得なり。因果を撥する一切なり」(大正卷二九 八八c)を指摘。

- (12) 一闡提「Ichantikaの音写語。断善根、焼種、信不具足と訳す。

- (13) 統善根「水野脚注に『俱舍論』巻一七の「善根を断じ已て何に由りてか復た統くや。疑と有見とに由る。謂く、因果の中に、有る時は疑を生じて、此れ或いは応に有るべしとし、或いは正見を生じて、定んで有にして無に非じとす。爾の時に善根の得、還た統起す。善の得起る故に統善根と名づく」(同 八九b)を指摘。金子宗元「断善根と統善根について 道元禅師晩年の思想的背景と経典引用を中心として」(『宗学紀要』第一五号、二〇〇二年三月)参照。

- (14) その帰依三宝……「口にとなへていはく」まで、『修証義』第三章第二節に引用。それにづく「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」の三句は、三聚浄戒に統く「仏祖正伝菩薩戒作法」(大久保本 二六七頁)も指摘されるが、『道心』の「心をはげまして三宝となへたてまつり、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、となへたてまつらんこと、わすれず、ひまなく、となへたてまつるべし」(同 四七二頁)も引用と考えられよう。なぜならば、『修証義』第三章の冒頭の第一一節は、『道心』の「つきにはぶかく仏法僧三宝をつやまひたてまつるべし。生をかへ身をかへても、三宝を供養し、つやまひたてまつらんことをながぶべし」(同 四七一頁)の引用となっているからである。

- (15) 我某甲、今身……「口誦三帰の語は、第二『受戒』(同 一一〇頁)に既出してあり、その文は『禅苑清規』巻九の「沙弥受戒文」の引用になる。『禅苑清規』の文は次のようになっている。

善男子、汝既に身口意の業を浄治す。次に応に仏法僧宝に帰依すべし。帰依仏、帰依法、帰依僧、帰依仏両足尊、帰依法離欲尊、

帰依僧衆中尊、帰依仏竟、帰依法竟、帰依僧竟。如来至真等正覚は是れ我が大師なり、我れ今ま帰依す。今より已⁵去、仏を称して師と爲し、更に邪魔外道に帰依せじ。慈愍の故に。三たび説き、第三に「慈愍故」を疊んで三辺す。沙弥 第一、第二、第三各おのの小礼一拜、一に大礼三拜、胡跪合掌す。善男子よ、汝既に邪を捨て正に帰す。戒已に周円す。(前掲書 三〇八頁)

「我某甲、今身より仏身にいたるまで」の語は、「菩薩總経本業經」卷下(大正巻二四 一〇二a)等に繰り返される「從今身至仏身」を踏まえた、智顛説「菩薩戒義疏」先受三帰云、我某甲、從今身至仏身、於其中間、帰依常住仏、帰依常住法、帰依常住僧、(三説)(大正巻四〇 五六八a)などにより、付加されたものと思われる。

(16) 僧那 = samana の音写語、梵語は鍍の意。弘誓、大誓と意訳す。弘誓を鍍にたとえる。

(17) 刹那刹那に生滅、刹那生滅については、第四「発菩提心」に次の説示がある。

この刹那の量は、ただ如来ひとりあきらかにしらせたまふ。一刹那心、能起一語、一刹那語、能説一字も、ひとり如来のみなり。余聖不能なり。おほよそ壯土の一弾指のあひだに、六十五の刹那ありて、五蘊生滅すれども、凡夫かつて不覚不知なり。但刹那の量よりは、凡夫もこれをしれり。一日一夜をふるあひだに、六十四億九万九千九百八十の刹那ありて、五蘊ともに生滅す。しかあれども、凡夫かつて覚知せず。覚知せざるがゆゑに、菩提心をおこさず。仏法をしらず、仏法を信ぜざるものは、刹那生滅の道理を信ぜざるなり。もし如来の正法眼蔵涅槃妙心をあきらむるがときは、かならずこの刹那生滅の道理を信するなり。(同 一八二―三頁)

(18) いはゆる帰依とは……「こは」大乘義章 卷一〇三帰義三門分別に基づいて。

第一釈名なり。三帰と言うは、帰投し、依伏するが故に帰依と曰うなり。帰投の相は、子の父に帰するが如く、依伏の義は、民の王に依るが如く、性(怯力)の勇に依るが如し、女の怯きが男に依るがごとし(大正巻四四一―六五四a)

(19) いはゆる救済の言なり「俱舍論」卷一四に「是の如き帰依は何を以て義と爲す。救済を義と爲す。彼を依と爲すに由りて能く永く一切の苦を解脱するが故に」(大正巻一九一七六c)とあり、この説が付加される。この文の続きは、四段(一)(同 二六一頁)に引用される。後註(33)参照。この付加を指摘した水野脚注は、「帰依仏宝僧宝」の巻として極めて重要であると言えよう。その問題に関連する例を三つ挙げておこう。

『弁道話』

予、かかねて大宋国におもむき、知識を両浙にとがらひ、家風を五門にきく。つひに太白峰の淨禪師に参じて、一生参学の大事(こ)にをはりぬ。それよりのち、大宋紹定のはじめ、本郷にかへりし、すなはち、弘法救生をおもひとせり、なほ重担をかたにおけるがごとし。しかあるに、弘道のところを放下せむ激揚のときをまつゆゑに、しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえんとす。

(岩波 一 二二―二三頁)

「閑居の時」六首の一)。

生死憐れむべし休して又た起こる、迷途と覺路と夢中に行く。然りと雖も尚お忘れ難き事有り、深草の閑居、夜雨の声。

『永平広録』巻五、三十九上堂。(道元禪師五一歳)

六月初十、祈晴上堂。去年今年、春夏秋冬、天下降雨し、昼夜思ます。百姓憂愁し、五穀登らず。今、永平長老、国土の憂愁を濟拯せんが爲に、先師天童の清涼に任せし時の祈晴上堂を挙げて、亦た以て晴を祈らん。所以は何ん。佛法、如し人天の苦に加さずんば若爲せん。大衆還た永平の意旨を委悉すや。先師未だ上堂せざる時、諸仏諸祖未だ曾て上堂せず。先師上堂の時、三世の諸仏・六代の祖師・一切の鼻孔・万箇の眼睛、同時に上堂す。一刻も先んずることを得ず、半刻も後ることを得ざるなり。永平今日の上堂も、亦復た是の如し。良久して云く、一滴思ます両滴、三滴、滴滴瀝瀝、朝を連ね夕に至る。變じて滂沱と作るも奈何ともするなし。山河大地、風波衰る。噴嚏を打ること一下して云く、総て衲僧の噴嚏の一激を出です。直に得たり曇開いて日出づることを、扠子を挙して云く、大衆、者裏において看るべし。朗朗たる晴空、八極を呑む。若し還た依旧として水漉漉たらば、渾家、羅刹国に飄墮せん。稽首す釈迦、南無弥勒。能く世間の苦を救いたまえ、観音の妙智力。吽(春秋社本三二四二頁)

なお、石井修道「尚お忘れ難き事あり 道元の帰依と救済」、『印仏研』四八一、一九九九年二月(参照)

- (20) 仏はこれ大師……『大乘義章』卷一〇に、「帰依同じからずして境に随つて三を説く。所謂る仏に歸し法に歸し僧に歸するなり。仏を師と爲すに依るが故に仏に歸す」と曰い、法を業と爲すに憑るが故に法に歸すると稱し、僧を友と爲すに依るが故に僧に歸すると名づく(大正四四 六五四a)とあるのによる。『修証義』第三章第二三節に引用される。

- (21) 問……『同』同く『大乘義章』卷一〇による。問うて曰く、「何が故にか偏に此の三に歸するや。」「此の三種は畢竟の歸処にして能く衆生をして生死を出離せしめ、涅槃に稱わしめるを以ての故に」。名義は是の如し(大正四四 六五四a)。「大乘義章」は、「証大菩提故帰」を「称涅槃樂」に作る。

- (22) 不可思議功德『大乘義章』卷十に「宝性論」の「宝」の六義(希有義・離垢義・勢力義・莊嚴義・最勝義・不改義)を説く中に、「三に勢力の義、世の珍宝は寶を除き毒を去り大勢力を有つが如し。三宝も是の如し。不可思議の六神通力を具す。故に説いて宝と爲す」(同 六五四b)とある。

- (23) 仏……『同』同書のついで、「言つ所の仏とは、外国の正音には、名づけて仏陀と爲し、此には覺者と云つ」(同 六五四a)とある。

- (24) 法……『同』同書に「言つ所の法とは、外国の正音には、名づけて達摩と爲し、亦た曇無と名づく。本是れ一音にして、之を伝えるに別なるのみ。此に翻じて法と名づく。法の義同じからず。汎そ釈に二有り。一は自体を法と名づく、『成実』に説くが如し。所謂る一切の善・悪・無記の三聚の法等なり。二は軌則を法と名づく。行儀を弁彰して、能く心の軌と爲る。故に名づけて法と爲す。

今ま三宝中に論ずる所の法は、軌則を法と名づく(同 六五四a b)とある。

(25) 僧…… = sangha. 同書に「言つ所の僧とは、外国の正音には、名つけて僧伽と曰ふ。此方に翻訳して和合衆と名づく。行徳ぎよく乖ちがわざるを、之を名つけて和と為す。和する者は一に非ず、之を名つけて衆と為す」(同 六五四b)とある。

(26) 住持三宝…… = 以下の四種三宝説は、懷顯「律宗新学名句」に近いことを最初に指摘したのは、林鳴宇「成立背景から見た『仏祖正伝菩薩戒作法』の意義」(宗学研究 第四一号、二〇〇〇年三月)である。このことについては後述する。

(27) 化儀三宝…… = 同じく「律宗新学名句」巻上参照。

(28) 理体三宝…… = 右に同じ。

(29) 一体三宝…… = 右に同じ。

(30) もし薄福少徳の衆生…… = 『大乘義章』巻十にある次の文を踏まえる。

『宝性論』の中に釈して六義有り。之を喩えるに宝の如し。一は希有の義なり。世の宝物は貧窮の人の能く得ざる所の如し。三宝も是の如し。薄福の衆生は千万の世に有るも値遇すること能わず。故に名つけて宝と為す」(前掲書 六五四b)

この文は、『修証義』第三章第二節に引用される。

(31) 法華経曰…… = 『法華経』如来寿量品(大正九 四三三c)による。

(32) 諸仏如来…… = 『法華経』方便品に「諸仏世尊は、唯だ一大事因縁を以ての故に世に出現したもう」(同 七b)とある。この箇所については、後に試訳する『道心』及び後註の(76)参照。

(33) 世尊言…… = 『俱舍論』巻一四に「有余師説く、帰依仏とは、總じて如来十八不共法に帰依す。此の能帰依は何法を体と為すや。語表を体と為す。是の如く帰依は何を以て義と為すや。救済を義と為す。彼の依と為すに由りて能く永く一切の苦を解脱するが故に。世尊の言つが如し。衆人所遇を怖れて……」(大正二九 七六c)となり、この偈文の引用につづく。『大毘婆沙論』巻三四(大正巻二七 一七七a)も偈は同じだが、「世尊言」を「契経説」に作る。また、前文の帰依に救済の義があることについての引用は、前註(19)に触れた。また、『輔行伝弘決』巻四之二に「三帰とは、即ち三蔵の三宝を以て三帰と為す」(大正巻四六 一五三b)に続いて、この『俱舍論』の文が「能解脱衆苦」まで引用される。このことについては、後述する。なお、如来十八不共法とは、十力(一、処非処智力・二、業異熟智力・三、静慮解脱等持等至智力・四、根上下智力・五、種種勝解智力・六、種種界智力・七、辺趣行智力・八、宿住隨念智力・九、死生智力・十、漏尽智力)と四無畏(一、正等覺無畏・二、漏永尽無畏・三、說障法無畏・四、說出道無畏)と三念住(一、諸弟子衆、一向恭敬能正受行、如来縁之不生歡喜、捨而安住正念正知・二、諸弟子衆、唯不恭敬不正受行、如来縁之不生憂感、捨而安住正念正知、三、諸弟子衆、一類恭敬能正受行、一類不敬不正受行、如来縁之不生歡喜、捨而安住正念正知)と大悲をいう。『俱舍論』巻二七(大正二九 一四〇c)一a)参照。

(34) 制多calyaの音写で、支提とも音写する。方墳と訳し、豊廟トヨミヤのことで、舍利を祭る仏教の建物とは異なるもの。『供養諸仏』考、八二頁及びその註参照。

(35) 四聖諦シヤウジヤウキに「仏教」に「三乘。一者声聞乘。四諦によりて得道す。四諦といふは、苦諦・集諦・滅諦・道諦なり。これをきき、これを修行するに、生老病死を度脱し、般涅槃を究竟す。この四諦を修行するに、苦・集は俗なり、滅・道は第一義なりといふは、論師の見解なり。もし仏法によりて修行するがときは、四諦ともに唯仏と伝なり。四諦ともに法住法位なり。四諦ともに実相なり、四諦ともに仏性なり。このゆゑに、さらに無生無作等の論におよばず、四諦ともに總不要なるゆゑに」(岩波文庫本二・三〇二頁)とある。また、『仏本行集経』卷三二に、「爾の時、仏、諸の比丘に告げて言く。汝等比丘よ。至心に諦聴せよ。四聖諦有り。何等をか四と為すや。謂く、苦聖諦、苦集聖諦、苦滅聖諦、得道聖諦なり。此の如きを名づけて四種聖諦と為す。諸の比丘よ。何等をか名づけて苦聖諦と為すや。所謂る生苦・老苦・病苦・死憂悲苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦なり。此の諸の苦の故に苦聖諦と名づく。諸の比丘よ。何等をか名づけて苦集聖諦と為すや。所謂る此の愛の数数心を動かし、思欲の事を発し、処処に思想し、是れ則ち名づけて苦集聖諦と為す。諸の比丘よ。何等をか名づけて苦滅聖諦と為すや。所謂る彼の愛を遠離棄捨して、悉く除滅し尽して、余残を留めず、心及び心想を一切寂定す。是れ則ち名づけて苦滅聖諦と為す。諸の比丘よ。何等をか名づけて得道聖諦と為すや。遠んて此の八正聖路を得る。所謂る正見・正分別・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。此れを滅苦得道聖諦と名づく」(大正三・八一―b)とある。

(36) 八支聖道ハシヤウジヤウとは、正見道支・正思惟道支・正語道支・正業道支・正命道支・正精進道支・正念道支・正定道支をいう。『三十七品菩提分法』(岩波文庫本三・二九二―三〇九頁)参照。

(37) いたづらに……『修証義』第三章第一二節に引用。

(38) 牛戒・鹿戒……『大智度論』卷二二に『涅槃経』卷一六の合様。

『大智度論』卷二二に、「外道の戒とは、牛戒・鹿戒・狗戒・羅刹鬼戒・唾戒・嚙戒なり。是の如き等の戒は、智の讚めざる所なり。唐しく苦しんで善報無し」(大正二五・二二六a。岩波文庫本脚注参照)とある。

『涅槃経』卷一六に、「牛戒・鶏・狗、雉の戒を受持し、灰を以て身に塗り、長髪もて相を為し、羊を以て祠まつる時、先に呪いのりて後法、能く無上解脱の因なりと為さば、是の処有ること無けん。是を名づけて知と為す」(大正二二・四六二a)とある。

(39) 人身つることかたし……『修証義』第一章第二節に引用。

(40) はやく仏法僧三宝……『修証義』第三章第一二節に引用。

(41) 希有経云……『湛然』法華玄義釈義』卷一〇(大正三三・八八四a)の孫引き。このことについては後文参照。三歸の功德。

『希有經』、『増一阿含經』。

(42) 四天下…… 『佛依仏法僧宝』の本文に解説あり。六欲天は、四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化乐天・他化自在天をいう。

(43) 四果『四沙門果』、ここでは阿羅漢果をいう。

(44) おほくふかき『釈籤』の原文には「多」が元来存在していた。

(45) 増一阿含經云…… 『釈籤』巻一〇(前掲書八八四a)の孫引き。前註(41)参照。

(46) 五衰『俱舍論』巻一〇に、小衰相と大衰相の五相を述べる。「然るに諸の天子は、將に命終せんとする時、先に五種の小衰相を現すること有り。一は衣服、嚴具は、非愛の声を出たす。二は自身の光明は、忽然として昧劣せり。三は沐浴の位において水滴身に着く。四は本性羸馳して一境に滞おらしむ。五は眼は本より凝寂なるも数しば瞬動せしむ。此の五相現わるも、定んで当に死すにはあらず。復た五種の大衰相を現すること有り。一は衣は埃塵に染まる。二は花鬘萎悴す。三は両腋より汗出づ。四は臭氣身にいる。五は本座を樂しまず。此の五相現わるれば必ず定んで当に死すべし」(大正二九 五六c)とある。なお、羸馳とは盛んに動きまわること。岩波文庫本脚注参照。

(47) 世尊在世…… 『大集經』の三歸濟龍品に、「彼の龍衆中の二十六億の諸の飢えたる龍等は過去身を念いて皆な悉く雨のごとく涙して是の如く言を作さく、「ただ願わくは……」」(大正一三 二九一b)とあるのに基づく。この經の品名にあるように「三歸」に関わる經典の引用である。

(48) 仏告諸龍…… 『前文に続く文で、大正藏經で一段半の省略あり。同書(同 二九二a)による。

(49) 賢劫中…… 『四劫(成・住・壞・空)の中の現在の住劫の二十増減中に千仏の出世があるので賢劫という名がある。その最後の仏が樓至仏(Ruci)である。『現在賢劫千仏名經』の千仏目に「南無樓至仏」(大正一四 三八三a)の名が見える。

(50) しるべし、三歸…… 『修証義』第三章第一四節に引用。

(51) いまの衆生、いたづらに…… 『称名念仏の否定』『弁道話』(二二二一年記)の第三問答。

とぶていはく、あるいは如来の妙術を正伝し、または祖師のあとをたづめるによらむ、まことに凡慮のおよぶにあらす。しかはあれども、読經・念仏はおのづからさとの因縁となりぬべし。ただむなく坐してなすところならむ、なによりてかさとりをつるたよりとならむ。

しめしていはく、なんぢいま諸仏の三昧、無上の大法を、むなく坐してなすところなしとおもはむ、これを大乘を謗する人とす。まどひのいとふかき、大海のなかにゐながら水なしといはむがごとし。すでにかたじけなく、諸仏自受用三昧に安坐せり。これ仏大の功德をなすにあらすや。あはれむべし、まなこいまだひらけず、こころなほ冥ひにあることを、おほよそ諸仏の境界は不可思議なり、心識のおよぶべきにあらす、いはむや不信劣智のしることをえむや。ただ正信の大機のみ、よくいることをするなり。不信の人

は、たとひをしふともうくべきことがたし。靈山になほ退亦佳矣のたくひあり。おほよそ心に正信おこらば修行し參学すべし。しか
あらずは、しばらくやむべし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ。

又、誦經・念仏等のつとめにうるところの功德を、なんぢしるやいなや。ただしたをうごかし、こゑをあぐるを仏事功德とおもへる、
いとほかなし。仏法に擬するにうたたとほく、いよいよよはるかなり。又、經書をひらくことは、ほとけ頓漸修行の儀則をしへおけ
るを、あきらめしり、教のごとく修行すれば、かならず証をとらしめむとなり。いたづらに思量念度をつひやして、菩提をうる功德
に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千萬誦の口業をしきりにして仏道にいたらんとするは、なほこれなげえをきたにして、越にむ
かむとおもはんがごとし。又、円孔に方木をいれんとせんとおなじ。文をみながら修するみちにくらき、それ医方を見る人の合業
をわすれん、なにの益かあらん。口声をひまなくせる、春の田のかへるの、昼夜になくがごとし、つひに又益なし。いはむやふかく
名利にまごはさるるやから、これらのことをすてがたし。それ利貪のころはなはだふかきゆゑに。むかしすでにありき、いまのよ
になからむや。もともあはれむべし。

ただまさにしるべし、七仏の妙法は、得道明心の宗匠に、契心証会の学人あひしたがうて正伝すれば、的旨あらはれて裏持せらるる
なり、文字習学の法師のしりおよぶべきにあらず。しかあればすなはち、この疑迷をやめて、正師のをしへにより、坐禅并道して諸
仏自受用三昧を証得すべし。(岩波文庫本 一〇〇～一二三頁)

(52) 爾時衆中有盲龍女……『大集經』の註(48)の続きの文(同 二九二a,b)。

(53) 為救餓故……『捨身救餓の話は、一般に國王の名は尸毘王と呼ばれる話が有名で、『賢愚經』卷一(大正四 三五一c)二b)や

『大智度論』卷四(大正二五 八七c)八c)に出づ。岩波文庫本脚注の『六度集經』卷一(大正卷三 一b c)も参照。

(54) 天帝釈……第九段に詳しく取り上げられる。

(55) 仏在迦毘羅……『涅槃經』卷三四迦葉菩薩品(大正二二 五六八b)の釈摩男(Sakyā-Mahānāman)が優婆塞になる話。

(56) 優婆塞……『袈裟功德』に四衆の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は既出(岩波文庫本四 一三八頁)。

(57) 仏弟子となること……『下の』三帰によりて得戒あるなり』の文まで、『修証義』第三章第一三節に引用される。

(58) 法句經云……『驢胎より天帝釈に還る話は、『輔行伝弘決』四之二の孫引き。既に鏡島元隆氏によって指摘されている。元來は『法
句譬喻經』卷一(大正四 五七五b,c)。後文で検討。

(59) 歸依三宝の功德力なり……前前註に指摘する『輔行伝弘決』の引用の最後の文の「天帝闍之得初果。故暫歸依即能翻破惡道心也」(大
正四六 二五九c)を承けている。

(60) 後五百歳……『仏滅後五百年ごとの解脱堅固・禪定堅固・多聞堅固・塔寺堅固・闍諍堅固をいう。』『大集經』月藏分(大正一三 三六三

a,b)による説で、末法説の根拠ともなり後世に大きな影響をあたえた。水野脚注参照。

- (61) 如来形像舍利等』第二段(5)の住持三宝の説参照。
- (62) 未曾有経云……』『輔行伝弘決』巻四之四(前掲書 一七二a b)による。この問題については、後述する。
- (63) 帰依』『未曾有経』は「懺悔」に作り、「輔行伝弘決」は「帰命」に作る。
- (64) 天帝釋畜為師の因縁』『摩訶止観』巻四下(前掲書 四五b)の語による。
- (65) いまわれら宿善のたすくるによりて』『修証義』総序第二節に引用。
- (66) 仏仏祖祖の法は、かならずそのはじめに帰依三宝』『帰依仏法僧宝』の冒頭の『禅苑清規』「一百二十問第一」もまたこのこと密接に繋がる。
- (67) 新善光寺』この寺で義雲が、同年の五月一七日に『虚空』を、五月二〇日に『安居』を書写したとする識語の存する写本が知られている。
- (68) 仏道をもとむる』『僧』のあり方の問題である。
- (69) 仏』三宝の「仏」を基本とすることの強調。
- (70) のり』「法」の強調。
- (71) われは世のはかなき……』『法の「諸行無常」と「諸法無我」への言及といえよう。
- (72) つぎには、ふかく……』『修証義』第三章第一一節に引用される。当然のこととして『帰依仏法僧宝』との密接な関係がある。
- (73) 中有』四有とは有情が生まれて死んで、更に生まれるまでを四つに区分したもので、一、生有とは諸趣に生まれる一刹那、二、本有とは生まれてから死ぬまでの存在、三、死有とは死ぬ時の最後の一刹那、四、中有とは死んでから生まれかわるまでの間の存在をいう。道元の詳細な中有説については今後の検討が必要であらう。『俱舍論』巻八(大正二九 四二b)・巻九(同 四六b c)参照。
- (74) 南無帰依仏……』『修証義』第三章第一三節との関連。
- (75) 三種とは、……』『供養諸仏』考「七三頁及び註」(34)参照。
- (76) 法華経……』『帰依仏法僧宝』の第三段と関連する。前註(32)参照。
- (77) 袈裟は、第三生……』『袈裟功德』(岩波文庫本一四八頁)に出る蓮華色比丘尼の話参照。